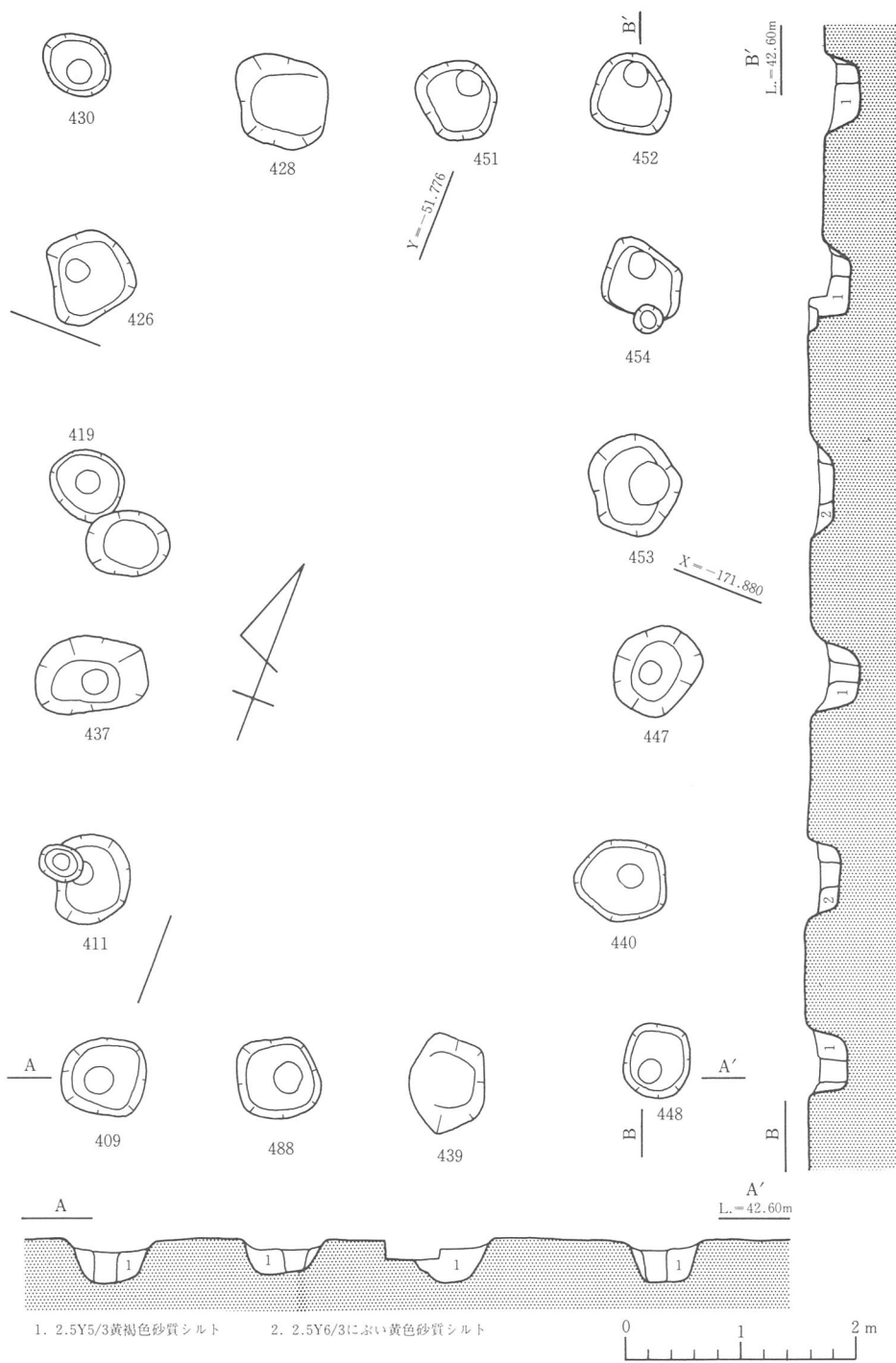
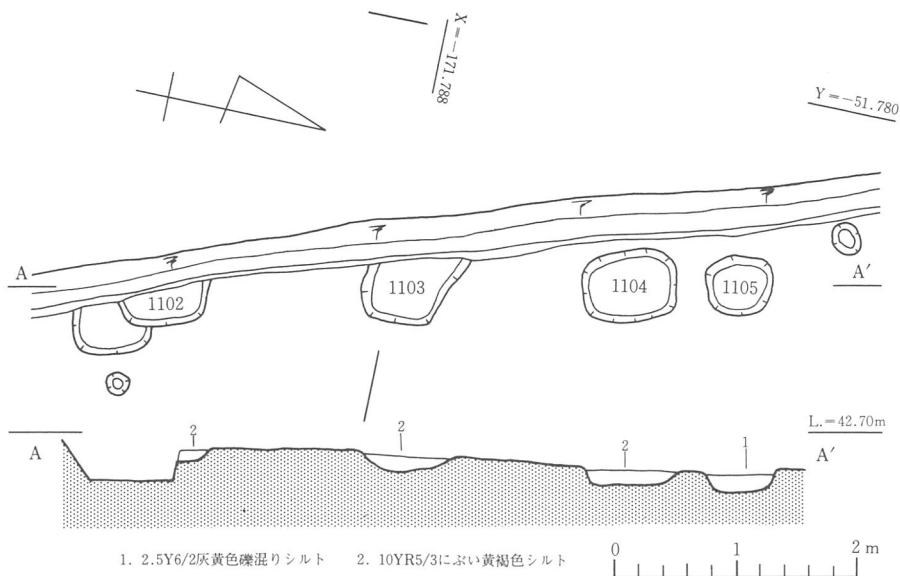


第38图 掘立柱建物210平面・断面图



第39図 掘立柱建物409平面・断面図



第40図 掘立柱建物1102平面・断面図

とともに周辺の他の遺構の検出面よりも下層で検出した。この下層の遺構面は12—O S、13—O S 付近以北にのみ存在するものと思われる。

建物は桁行5間（8.6m）、梁間3間（4.8m）、面積41.3㎡を測る。建物の主軸方向はほぼN—20°—Eである。

柱間は桁行が1.7~1.9mを測りやや不揃いである。梁間は少し狭く1.5~1.6mを測る。柱掘形は径0.6~0.9mの隅円方形を呈するものが多く、中にはやや変形したものもみられる。柱掘形の埋土はおおむね黄褐色系の円礫を含む砂質シルトである。

柱痕跡は428—O P、439—O Pを除くすべての掘形で検出した。径約0.2mである。

1102—O B（第40図）

擁壁2次調査時に409—O Bの南側E13W F付近において検出した掘立柱建物である。東側の柱筋2間分を検出したにとどまるが、大部分は西側に広がるものとみられる。

柱間はおよそ1.9mを測る。柱掘形は隅円の方角を呈し長径0.8m、短径0.6mを測る。検出時の柱掘形は深さ0.15mと浅く、大きく削平を受けていると思われる。柱痕跡は検出できず、柱の抜き取りの有無についても不明である。柱掘形の埋土はにぶい黄褐色系の円礫混じりのシルトである。

以上の掘立柱建物はいずれも古墳時代後期後半（6世紀末~7世紀）のものと思われるが、409—O B・1102—O Bはやや時期が降るものとみられる。

II調査区検出の柱穴（第41図）

以下の柱穴はII調査区北半部で検出された。時期の決め手となる遺物を欠くが、掘方の形態、埋土からI・II区で検出された掘立柱建物群と時期的に並行すると考えられる。

614—O P

II調査区北側西端に位置する。掘方は平面円形を呈し、径0.31m、埋土はにぶい黄褐色（10Y R4/3）粗砂質シルトである。柱根跡は径0.16m、深さ0.21mを測る。

625—O P

II調査区北東側に位置する。掘方は平面円形を呈し、径0.26m、埋土は灰褐色（7.5 Y R4/2）粗砂質シルトである。柱根跡は径0.19m、深さ0.19mを測る。

626—O P

II調査区北東側に位置する。掘方は平面形を呈し、径0.34m、埋土は褐色（10Y R4/4）砂質粘土である。柱根跡は径0.19m、深さ0.06mで、埋土は褐色（10Y R4/6）砂質粘土である。須恵器の細片が出土している。

628—O P

II調査区北東側に位置する。掘方は楕円形を呈し、径0.32m、埋土はにぶい黄褐色（10 Y R5/4）小礫混粗砂質シルトである。柱根跡は楕円形を呈し、長さ0.18m、幅0.11m、深さ0.15mで、埋土は灰黄色（2.5 Y 6/2）砂質シルトである。

637—O P

II調査区北側中央に位置する。掘方は平面不整形円形を呈し、径0.55mで、埋土は灰黄褐色（10Y R5/2）礫混粗砂質シルトである。柱根跡は径0.17m、深さ0.18mを測る。

632—O P

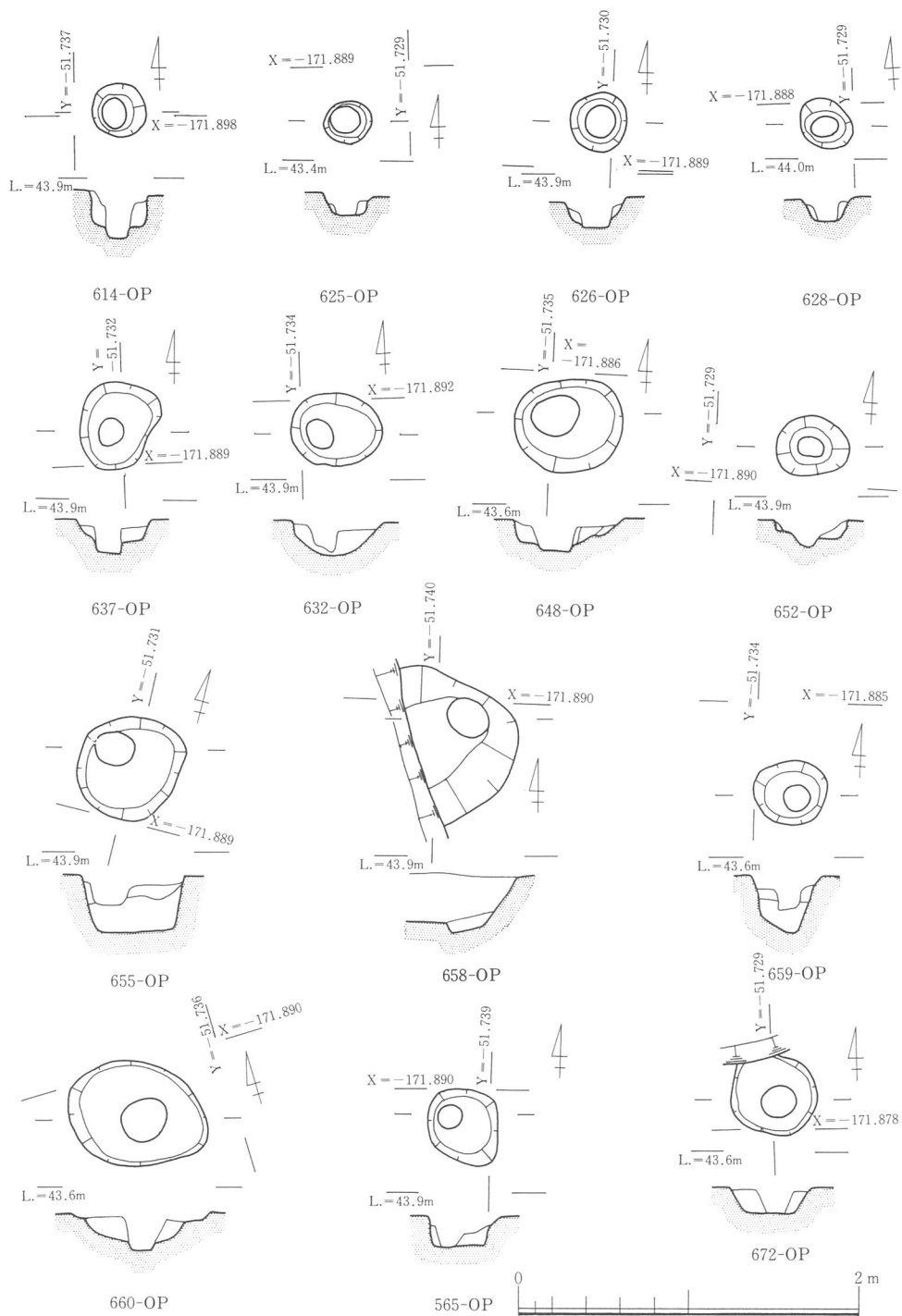
II調査区北側中央に位置する。掘方は平面楕円形を呈し、径0.35m、埋土は灰黄褐色（10Y R6/2）小礫混粗砂質シルトである。柱根跡は径0.21m、深さ0.18mを測り、埋土はにぶい黄褐色（10Y R5/4）粗砂質シルトである。

648—O P

II調査区北側中央500—O S 南側テラスに位置する。掘方は平面楕円形を呈し、径0.66m、埋土は褐灰色（10Y R6/1）粗砂質シルトである。柱根跡は径0.28m、深さ0.20mを測り、埋土は褐灰色（10Y R5/1）粗砂質シルトである。

652—O P

II調査区北側東端に位置する。掘方は楕円形を呈し、径0.23mを測る。埋土は灰黄褐色



第41図 II調査区柱穴平面・断面図

(10Y R6/2) 礫混粗砂質シルトである。柱根跡は径0.15m、深さ0.14mを測る。

655—O P

II調査区北側中央に位置する。掘方は隅円方形を呈し、径0.68m、埋土上層は黄褐色(2.5Y5/6)粘質土、下層は褐色(7.5Y4/6)シルトである。柱根跡は径0.23m、深さ0.21m、埋土はにぶい黄褐色(10Y R5/4)粗砂質粘土である。

658—O P

II調査区北側西端に位置する。西側は欠損しているが、現存長0.98mを測り、埋土は黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルトである。柱根跡は径0.24m、深さ0.30mを測る。

659—O P

II調査区北側中央の、500—O S南側テラスに位置する。掘方は平面形を呈し、径0.42m、埋土は褐灰色(10Y R5/1)小礫混粗砂質シルトである。柱根跡は径0.19m、深さ0.21mで、埋土は暗褐色(10Y R3/3)小礫混粗砂質シルトである。

660—O P

II調査区北側中央に位置する。掘方は平面楕円形を呈し、径0.86mを測る。柱根跡は径0.22m、深さ0.21mで、埋土はにぶい黄褐色(10Y R5/3)粗砂質シルトである。

565—O P

II調査区北側西端に位置する。掘方は平面隅円方形を呈し、径0.40mを測る。柱根跡は、径0.15m、深さ0.22mを測る。埋土は掘方が灰黄褐色礫混粗砂質シルト、柱根跡が黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルトである。

672—O P

II調査区北側に位置する。掘方は平面隅円方形を呈し、径0.48m、埋土は褐灰色(10Y R6/1)粗砂質シルトである。柱根跡は径0.22m、深さ0.16mを測る。

柵列

573—O F (第42図、図版十五)

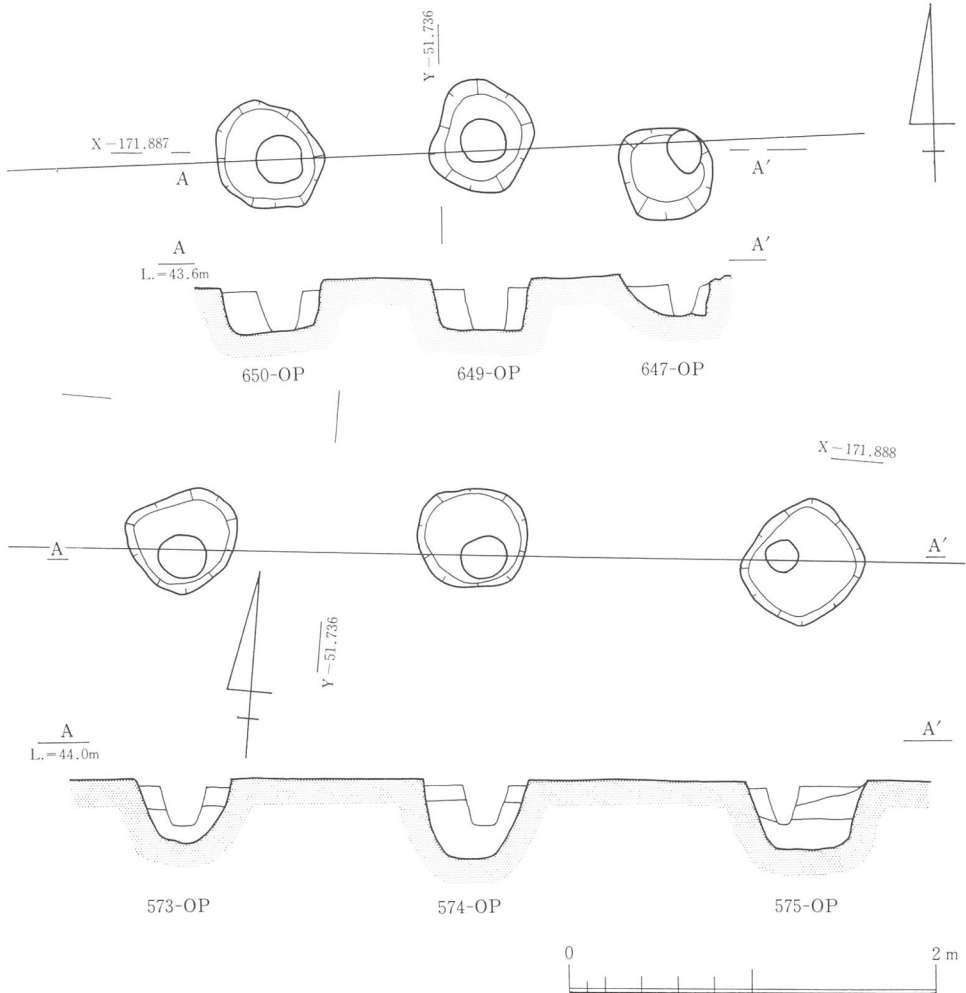
573—O FはII調査区の北端部で検出した。ほぼ東西に並ぶ3つの柱穴からなる。柱間は、約1.6m。掘形は一边約0.60mの隅円方形である。柱痕跡径はおよそ0.18~0.25mで、柱痕跡は掘形の底面に達していない。分層はできなかったが、本来は柱を設置する高さまで埋土を入れていたものと思われる。埋土は黄褐色系の砂質シルトで礫を含む。遺物はそれぞれより土師器片を検出したが、小片であるため図示できなかった。また軸線上にある

637—OP・626—OPを含めて柵列を形成する可能性を残す。

時期は遺物が希少なため不明であるが、I区の6世紀後半から7世紀初頭にかけての住居の埋土と類似することから、この柵列もその時期のものと考えられる。

650—OF（第42図、図版十五）

650—OFはII調査区の北端570—OOにはぼ平行するかたちで検出した。東西に並ぶ3つの柱穴からなる。柱間は約1.1mである。それぞれの掘形はおよそ0.50~0.60m、柱痕跡径は0.20~0.25mである。掘形の埋土は同一ではないが黄褐色系の砂質シルトで2cm大の礫を含む。この他には、対応する柱穴を検出することはできなかった。



第42図 柵650・573平面・断面図

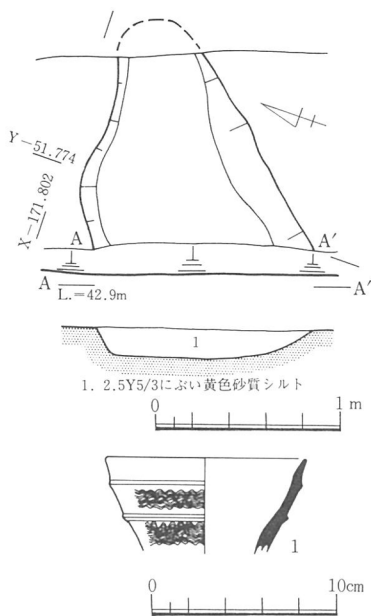
遺物はそれぞれより土師器片を検出したが、小片であるため時期を特定することはできない。

土坑

1140—〇〇（第43図）

1140—〇〇は擁壁2次調査時に、西側調査区の北側でその一部を検出した。その全容は不明であるが、調査区内においては、幅約0.5~1.2m、深さ約0.15mの不定形な土坑と推測される。埋土はにぶい黄褐色系の砂質シルトの単一層である。

須恵器壺の口縁部片が1点出土した。1は、復元口径11.0cm。頸部は、「S」字状に屈曲しながら外反する。断面三角形の凸帯を2条巡らせ、上から二段目と三段目に細かい波状文を施す。

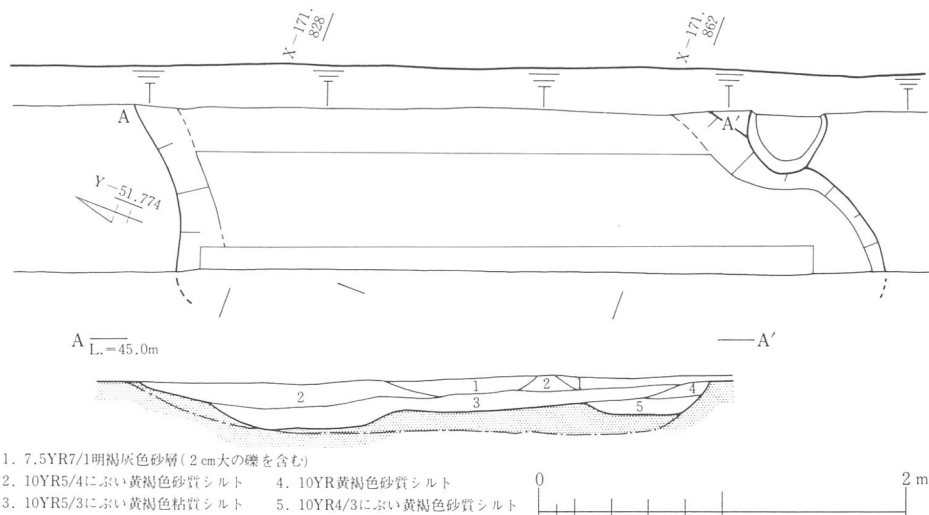


第43図 土坑1140平面・断面図
出土遺物実測図

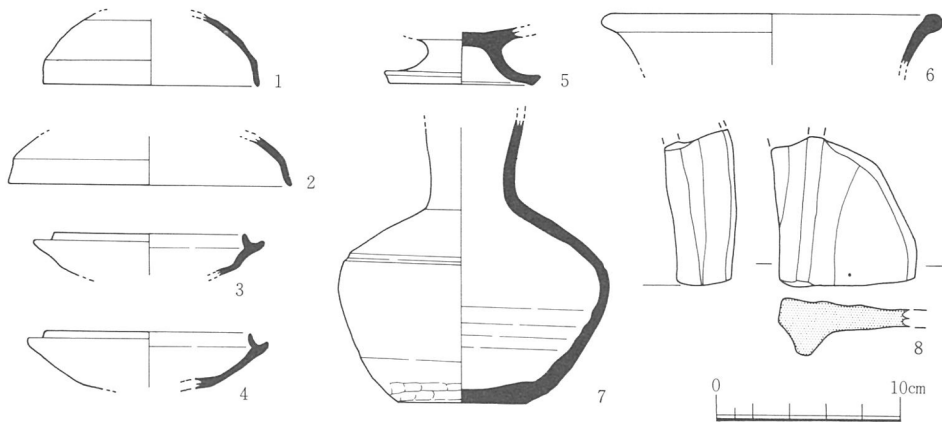
出土須恵器の様相から、この土坑は6世紀前半に比定される。

1132—〇〇（第44・45図、図版三一）

擁壁2次調査時に、東側調査区の南よりでその一部を検出した。調査区内においては、約3.2~3.8m、深さ約0.25mの不定形な土坑と推測される。一部に後世の攪乱を受けてい



第44図 土坑1132平面・断面図



第45図 土坑1132出土遺物実測図

る。埋土は大きく2層に分かれる。上層はにぶい黄褐色系の砂質シルト層、下層は同色系の粘質シルト層である。遺物は中央部及び北寄りで検出した。須恵器が大部分を占め、図示しなかったものでは須恵器甕片が多く存在する。

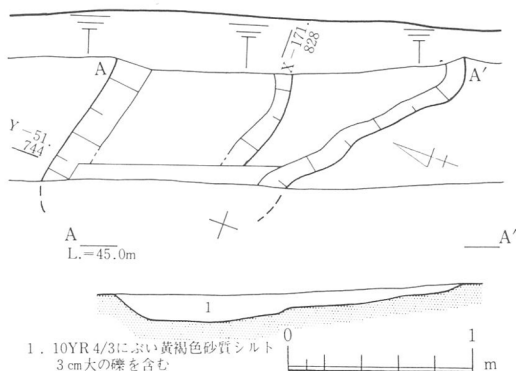
1・2は須恵器杯蓋である。復元口径はそれぞれ11.8cm・15.4cm。いずれも天井部と口縁部の境が不明瞭である。3・4は須恵器杯身である。復元口径はそれぞれ10.4cm・11.2cm。いずれも立ち上がりは短く、内傾してたちあがり、端部は丸い。受け部は短く、上外方に延び、端部は丸い。5は須恵器高杯である。脚部底径7.8cm、脚部高2.0cm。脚部付近で水平方向にのび、端部は丸い。6は須恵器壺である。底径6.8cm、体部高10.5cm、現存器高15.8cm。8は土師質の竈の一部とみられる。

出土遺物はすべて中村編年のII型式4～5段階の範疇に含まれるもので、この遺物から判断して土坑は6世紀後半から7世紀初頭に比定される。

1124—〇〇（第46・47図）

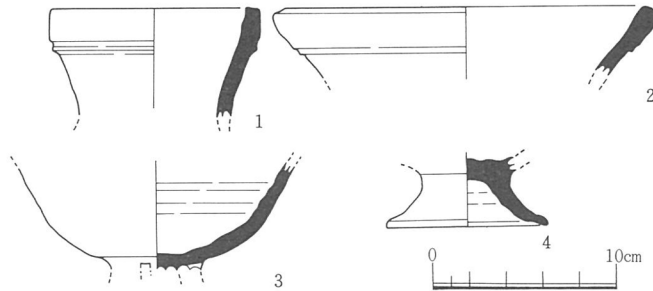
擁壁2次調査時に東側調査区の北側でその一部を検出した。その全容は不明であるが、調査区内においては幅約1.3～1.9m、深さ0.16mを測り、不定形な土坑と推測される。埋土は3cm大の礫を含む褐色系の砂質シルトの単一層である。

須恵器を数点検出した。1・2は同



第46図 土坑1124平面・断面図

一団体と思われる台付き壺である。復元口径10.0cm。頸部はやや外反し、口縁部は直立気味に伸び、端部を長方形に肥厚させ、その外面に1条の凹線を巡らせる。体部外面は右



第47図 土坑1124出土遺物実測図

方向の回転ヘラケズリを施し、底部内面は不定方向のナデを施す。脚部には3方向の方形透かし窓を穿孔する。3は、甕である。復元口径19.6cm口頸部は外反し、口縁端部を長方形に肥厚させる。肥厚部外面に、1条の凹線を巡らす。形態的には1と同じ特徴を有する。4は、高杯である。脚部底径8.8cm。脚部端付近で水平方向に広がり、端部は鋭い。

出土遺物は中村編年Ⅱ型式4～5の範疇に含まれるものであることから、この土坑は6世紀後半から7世紀初頭に比定される。

315—〇〇（第48・49図、図版十九・三〇）

I調査区南寄りに位置する不定型の土坑である。南半部は方形を呈している。395—〇〇に北端を切られている。現存の東西径1.7m、南北径1.9m、深さ約0.1mを測る。埋土は単純で黄褐色砂質土である。

出土遺物は少ないものの須恵器杯蓋、土師器甕・甕把手などがある（第49図1～4）。

395—〇〇（第48・49図、図版十九・三一）

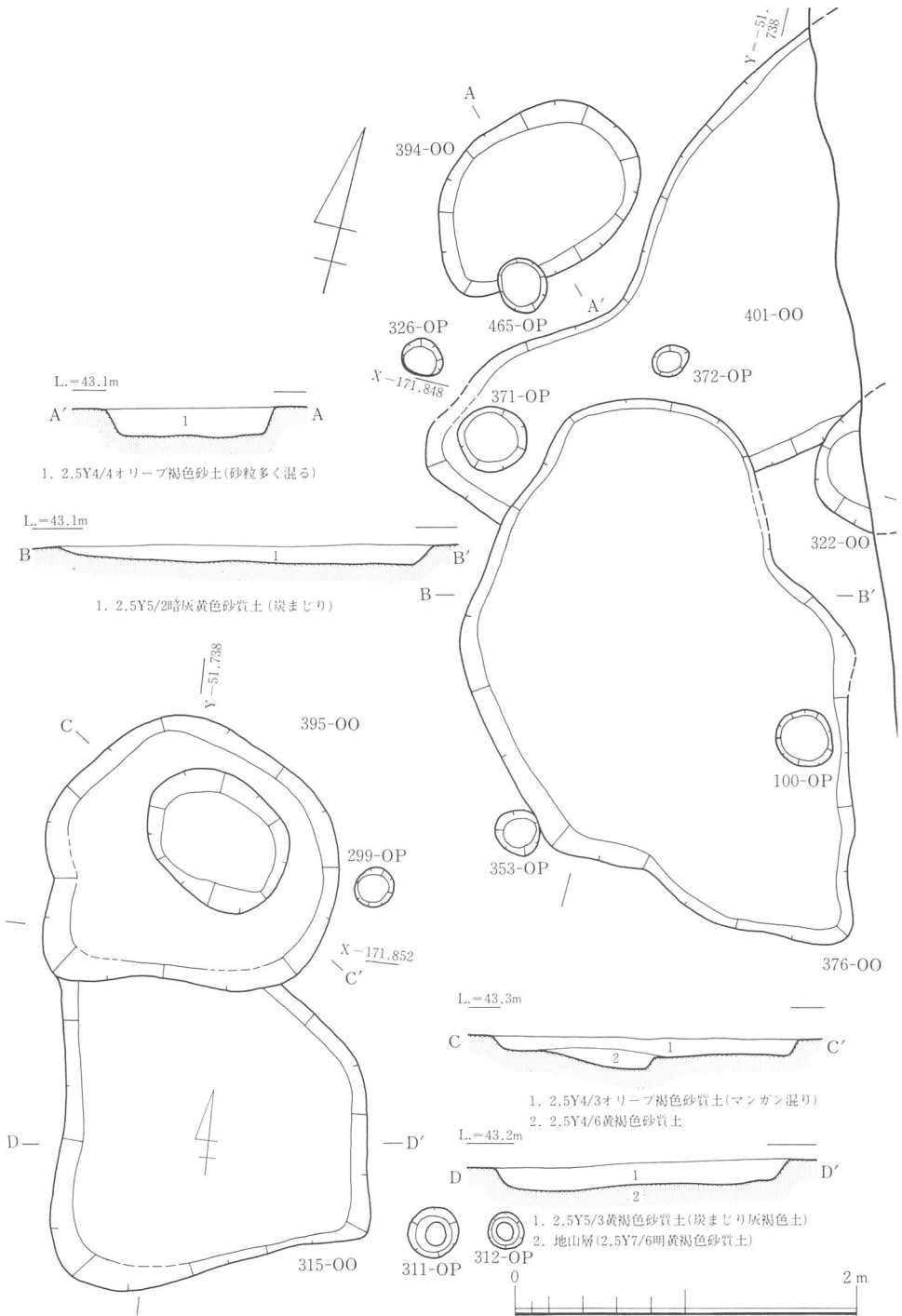
315—〇〇の北を削って二段に穿たれた円形を呈する土坑である。径1.7～1.8m、深さ約0.1mを測る。坑底をさらに一段浅く掘り下げて、二重底にしている。掘り下げた坑径は0.7～0.9mを測る。埋土は坑の部分で2層に分かれ、上部がオリーブ褐色砂質土、下部が黄褐色砂質土である。

出土遺物には須恵器杯身、3種類の高杯がある（第49図5～9）。

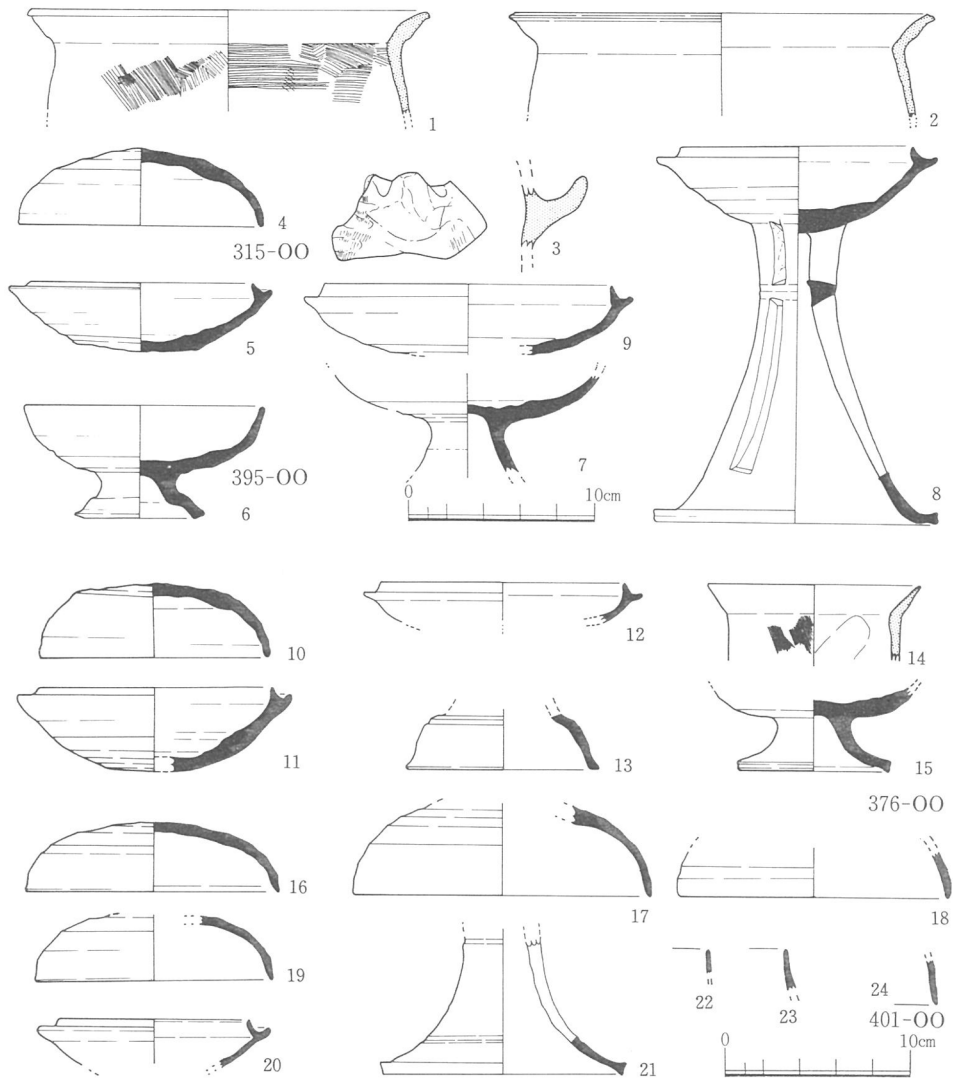
376—〇〇（第48・49図、図版二〇・三〇）

I調査区南寄りの315・395—〇〇の北に接して検出された不整形の土坑である。401—〇〇の一部を切っている。長径3.5m、短径2.1m、深さ0.1mを測る。坑底の東寄りに100—〇Pが検出されている。ピットの径は0.25mを測る。土坑の埋土は均一で暗灰黄色砂質である。

出土遺物には須恵器杯蓋・身、高杯、器台のほか土師器甕がみられる（第49図10～15）。



第48図 土坑315・395・376・394・401平面・断面図



第49図 土坑315・395・376・401出土遺物実測図

401—〇〇（第48・49図、）

376—〇〇に南端を切られている長方形の土坑である。東端部の形状については確認できていない。大小のピットや土坑が近接しており、坑内にも2個のピットが検出されている。土坑は長さ3.3m以上、幅約1.5m、深さ0.15m強を測り、周辺の他の土坑と比べてやや深くなっている。埋土は単一でオリブ褐色砂である。

出土遺物には須恵器杯蓋・身、長脚の高杯がある（第49図16～24）。

流路、溝

今回の調査ではⅡ・Ⅲ調査区北半から北寄りに多くの水路・溝が検出されている。中・近世の耕作時に関連すると思われる溝を除いても大きく2種に大別される。古墳時代に相当するものはⅡ調査区の北寄りにある弧状に曲がる大型の自然流路などがあり、方向に必ずしも規格性がない。一方、Ⅰ調査区の北端にL字に曲がる大型の水路（4—OS・496—OR）やⅡ調査区の北寄りに東西に流れる2本の溝など南北方向に規格的な水路は平安時代以降に属する。とくにⅠ調査区北端の4—OSは山直谷の条里地割りに合う位置に検出されている。また、Ⅰ調査区中央付近を斜めに横切る二つの溝のうち12—OSは4—OSとの切り合い関係が不明確ではあるが、出土遺物をみる限りでは4—OSに先行する可能性をもっている。

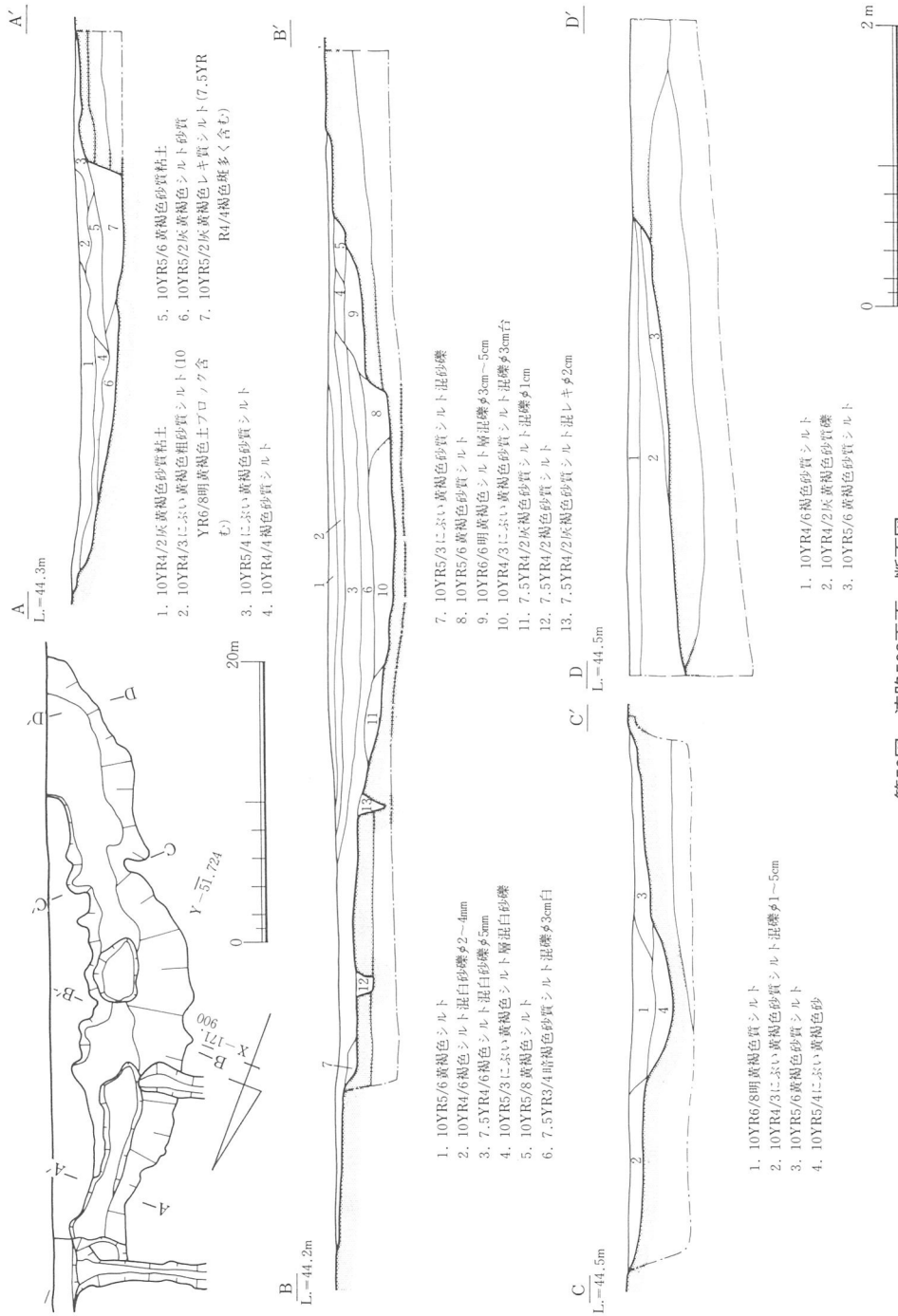
562—OR（第50・51図、図版十八）

Ⅱ調査区からⅢ調査区にかけての東側で検出した。幅およそ1.5mから3.5m、深さ0.25mを測る自然流路である。堆積は、3層に分けることができる。

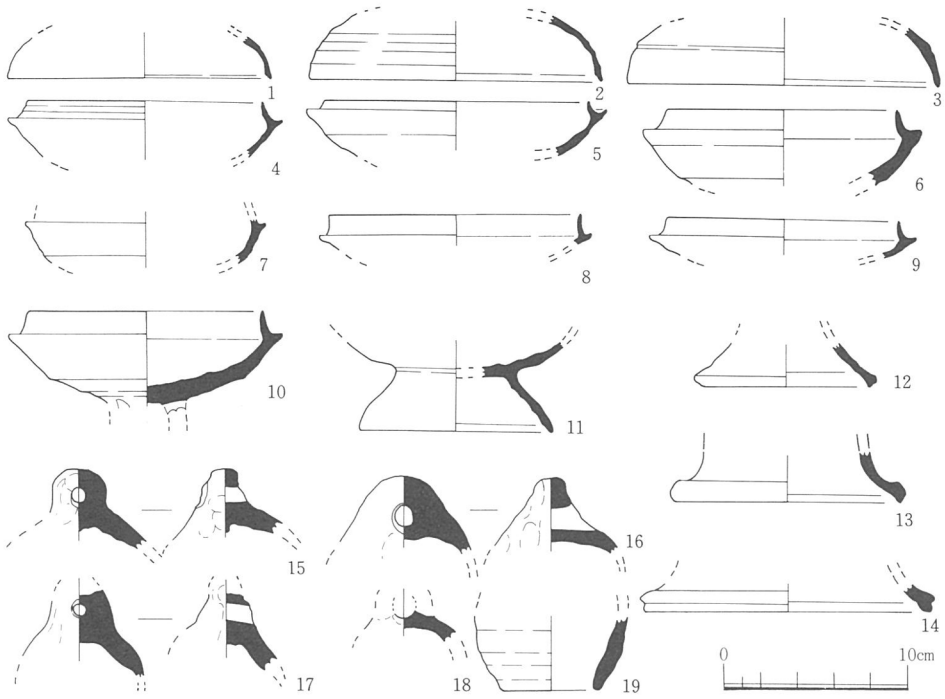
上層は褐色系の砂質シルト層、中層は暗褐色系の砂質シルト層、下層は砂層である。断面からは急激な堆積状況が認められる。500—OSとの交差する辺り等には砂溜まりがみられる。また、随所に後世の攪乱をうけている。

562—ORからは、国府型ナイフ形石器（第17図1）や多量の古墳時代の須恵器と若干の土師器が出土した。何れも細片であって図示し得たのは次の通り（第51図）である。

1～3は須恵器杯蓋である。復原口径14.0～16.9cmの範疇に含まれる。いずれも口縁部を二段に成形する。3は天井部と口縁部の境に鈍い稜が巡るが、1・2は天井部と口縁部が明確でない。4～9は須恵器杯身である。復原口径はいずれも12.4～14.4cmの範疇に含まれる。10～14は須恵器高杯である。10、復原口径12.8cm。長脚2段スカシと思われる。受部は水平方向に伸び、立上がりはやや立ち気味である。体部のおよそ1/3にヘラケズリを施す。スカシ窓は3方向に穿っている。11、復原脚部底径10.5cm、現存器高4.9cm。短脚1段スカシと思われる。現状ではスカシは見られない。12、復原脚部底径10.0cm、現存器高2.4cm。脚部端部は丸く作り内側をつまむように内傾させる。13、復原底径14.8cm、現存器高2.7cm。底径端部を丸く作り下方に伸ばす。14、復原脚部底径15.6cm、現存器高1.5cm。15～19は須恵器蛸壺形土器である。15、現存器高3.9cm、鈕内径0.9cm。鈕部が突出したタイプである。16、現存器高4.0cm、鈕内径1.0cm。鈕部から体部にかけてなだらかなタイプである。17、現存器高4.6cm、鈕内径0.9cm。15と16の中間に位置するタイプである。18、



第50図 流路562平面・断面図



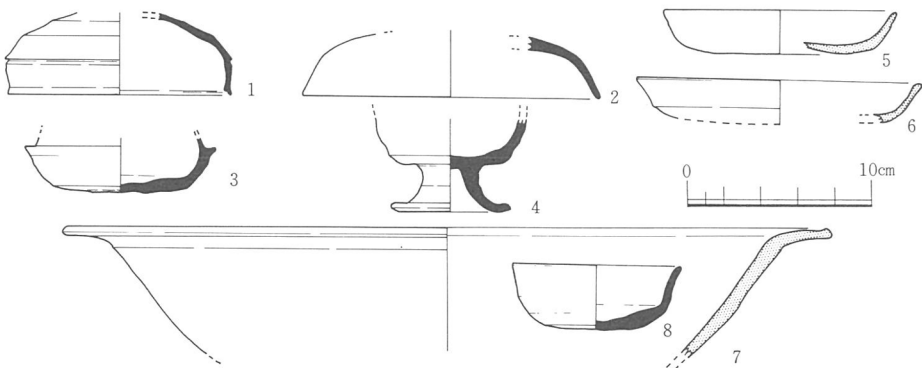
第51図 流路562出土遺物実測図

現存器高1.5cm。19、復原口径5.3cm、現存口径4.1cm。天井部に回転ナデが残る。

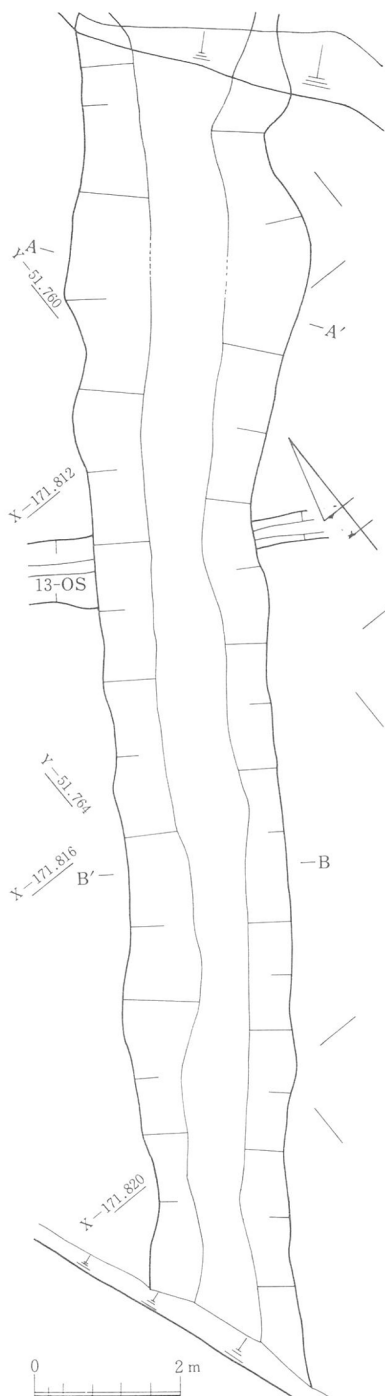
出土遺物の大半が中村編年II型式4～5段階に比定されるものである。この自然水路もほぼ当該期に考えておきたい。

13—OS (第52図、図版十七・三七)

I 調査区のほぼ中央を東西方向に直線的に横断する溝である。12—OS、4—OSに切られている。当該地区の中では最も古い時期に属する溝である。総延長約23mを検出した。



第52図 溝13出土遺物実測図

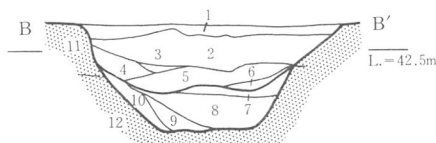


幅0.2～0.4m、深さ約0.2mを測る。埋土は単純でに
ぶい黄褐色砂質土である。出土遺物には少量ながら須
恵器・土師器がみられ、後述の溝12とほぼ同じ内容を
示す。

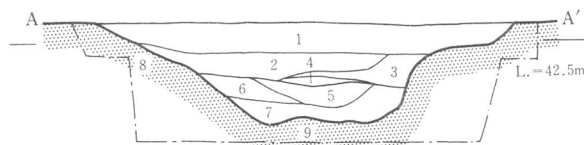
12—OS (第53・54図、図版十七・三五・三六)

I 調査区のほぼ中央を東西方向に横断する幅の広い
溝である。13—OSを切って検出されているが、双方
の溝の出土遺物には基本的な時期差はほとんど認めら
れない。東端を流れる4—OSとの切り合い関係は明
確ではないが、4—OSの底面には痕跡的に12—OS
の底が観察されている。

擁壁2次調査分を含め総延長22mを検出した。幅
2.0～3.0m、深さ0.3m前後を測る。埋土は場所によっ
て細かく分層できるが、大きくは2層に大別できる。



- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 上層 1. 10YR1/3にぶい黄褐色砂質土 | 下層 7. 10YR7/2にぶい黄褐色砂礫土 |
| 2. 10YR6/4にぶい礫混り砂質土 | 8. 10YR6/1褐灰色礫混粗砂 |
| 3. 10YR6/4にぶい砂質土層 | 9. 10YR7/1灰白色砂礫土 |
| 4. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質細砂土 | 10. 10YR7/1黄褐色混
灰白色粘質砂 |
| 5. 10YR6/2灰褐色礫混り粘砂 | 11. 黄褐色砂礫層 |
| 6. 10YR6/2礫混り砂土 | 12. 灰色砂礫層 |



- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 上層 1. 5YR5/2灰褐色砂礫混砂質土(木炭含) | 下層 5. 10YR6/1褐灰色細砂土 |
| 2. 7.5YR4/2灰褐色小礫混砂質土 | 6. 10YR7/1灰白色砂礫土 |
| 3. 7.5YR5/2灰褐色粘質細砂土 | 7. 10YR6/2灰黄褐色砂礫土 |
| 4. 7.5YR5/3にぶい褐色砂礫土 | |
| 地山層 8. 10YR7/8黄褐色砂礫層 | |
| 9. 7.5YR6/2灰褐色細礫混り砂礫層 | |



第53図 溝12平面・断面図



第54图 溝12出土遺物実測図

擁壁 2 次調査時の断面観察ではこの 2 層の間で遺物の様相が新古に区別される傾向がみられた。下層には古墳時代の土器、上層には奈良時代の遺物がおもに検出されている。

出土遺物については調査時に層位的な抽出を充分に行えなかったので一括して図示することにする（第54図）。遺物は上層主体に図示しているが、須恵器各種と土師器があり、下層資料としては須恵器壺（同図 4）がある。上層出土遺物には中央付近出土の 2・7・14～20・22・26 などの須恵器、土師器がみられる。20の土師器鉢と同種のものが13—O S からも出土している。

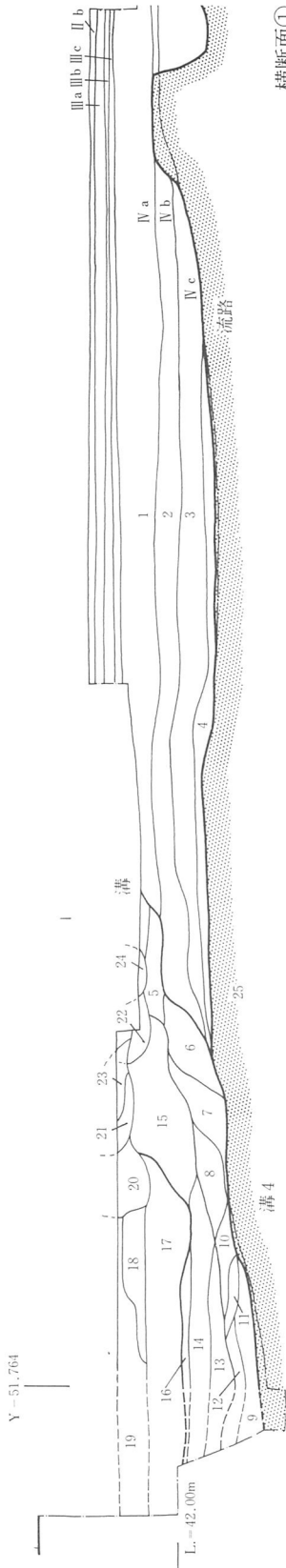
溝の時期については古墳時代まで遡る可能性を残すものの、ここでは白鳳期から奈良時代の中で考えておきたい。

4—O S（第55～57図、図版十六・三二～三四・三八）

I 調査区北東端を南から北に、調査区の東辺に沿って流れる大型の水路である。北端は調査区に直交して流れる 496—O R に続く。二つの水路の関係については必ずしも明らかではない。もともと 90° に曲がる流路であったのか別個の流路であったのか判断しがたいが、ここでは人工的に掘削された同一の水路と考えておきたい。北流する水路は新たな流路を確保するために何度か開削を受けているようで、複雑な流路を形成している。このため調査時には十分に個別の流路を識別しきれていない。出土遺物にはかなりの時間幅があり、それを溝の使用期間の幅に置き換えることはできないが、かなり長期にわたる時間幅を考えたい。また遺物の分布と出土レベルを検討した限りでは、現状で推定される水路個々の埋没過程に長い時間差を認めてよいかどうか判断し得ない。現在観察される山直谷の条里地割りに符合する位置にあるが、条里に關係する水路かどうかはその延長部の確認を含め今後の課題である。

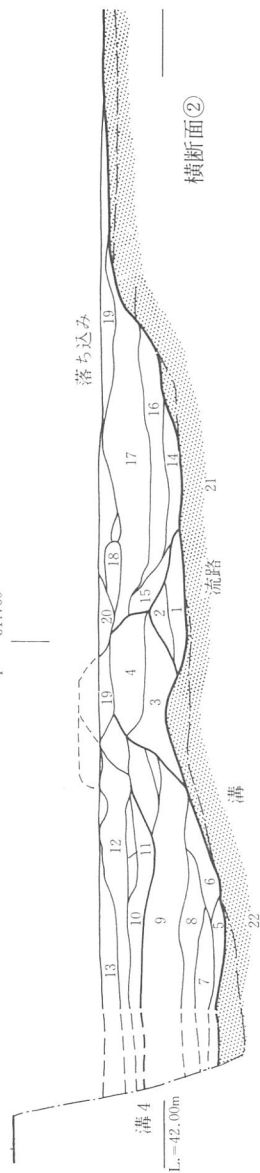
南北の総延長60m強を検出した。南端付近では深さ 0.2m前後、北寄りでは0.6～1.0m前後を測る。東側の肩部は調査区外にかかっているため流路幅は確かめられなかった。水路の上部は少なくとも16世紀以降の耕作層に相当する堆積物で覆われており、田畑の造成のために水路が埋められていると考えられる。水路の東肩部は409—O B の掘立柱建物の柱穴を覆う、古墳時代以後の整地層を切っている。

出土遺物は布留式期の壺から15・16世紀の瓦器まで長期間にわたるものを含んでいる。前述のように個別の流路での遺物の峻別ができていないので一括して報告する。第56・57図は流路とその中央付近の淵状の凹み付近の遺物にわけて古墳時代の遺物に限って図示しているが、図化資料以外にはいずれにも平安時代から中世にかけての良好な遺物が含まれ



横断面①

1. 10YR5/2灰黄褐色砂質土(礫砂多く含む)
2. 10YR6/2灰黄褐色砂質土(灰色キツイ)
3. 10YR6/4にぶい黄褐色砂質土(入頭木の礫混り)
4. 10YR6/2灰黄褐色粘質土(地山土混り)
5. 5Y7/1灰白色砂質土(上層より鉄分ちみ着)
6. 7.5Y6/1緑黄色プロック砂礫混り灰色粘質土
7. 10Y5/1灰色粘質土
8. 10Y6/1灰色砂質土
9. 2.5Y6/1黄灰色砂土
10. 2.5Y7/1灰白色粘砂土
11. 5Y7/6黄灰色砂礫土
12. 2.5Y6/1黄灰色粘土
13. 2.5Y6/2粗砂混り灰黄色細砂土
14. 2.5Y7/2灰黄色細砂土
15. 5Y6/3オリーブ黄粘砂土
16. 2.5Y7/3浅黄色微砂土
17. 2.5Y6/1黄灰色粘土
18. 2.5Y7/3浅黄色粘質土(水田畔畔)
19. 2.5Y7/2灰黄色砂質土(水田耕作土)
20. 2.5Y7/1灰白色砂質土(水田開溝)
21. 10YR7/2にぶい黄褐色砂質土
22. 2.5Y8/1灰白色砂質土
23. 10YR7/8黄褐色粘質土
24. 5Y7/1灰白色粘質土
25. 地下層(5Y7/6黄褐色砂礫層)

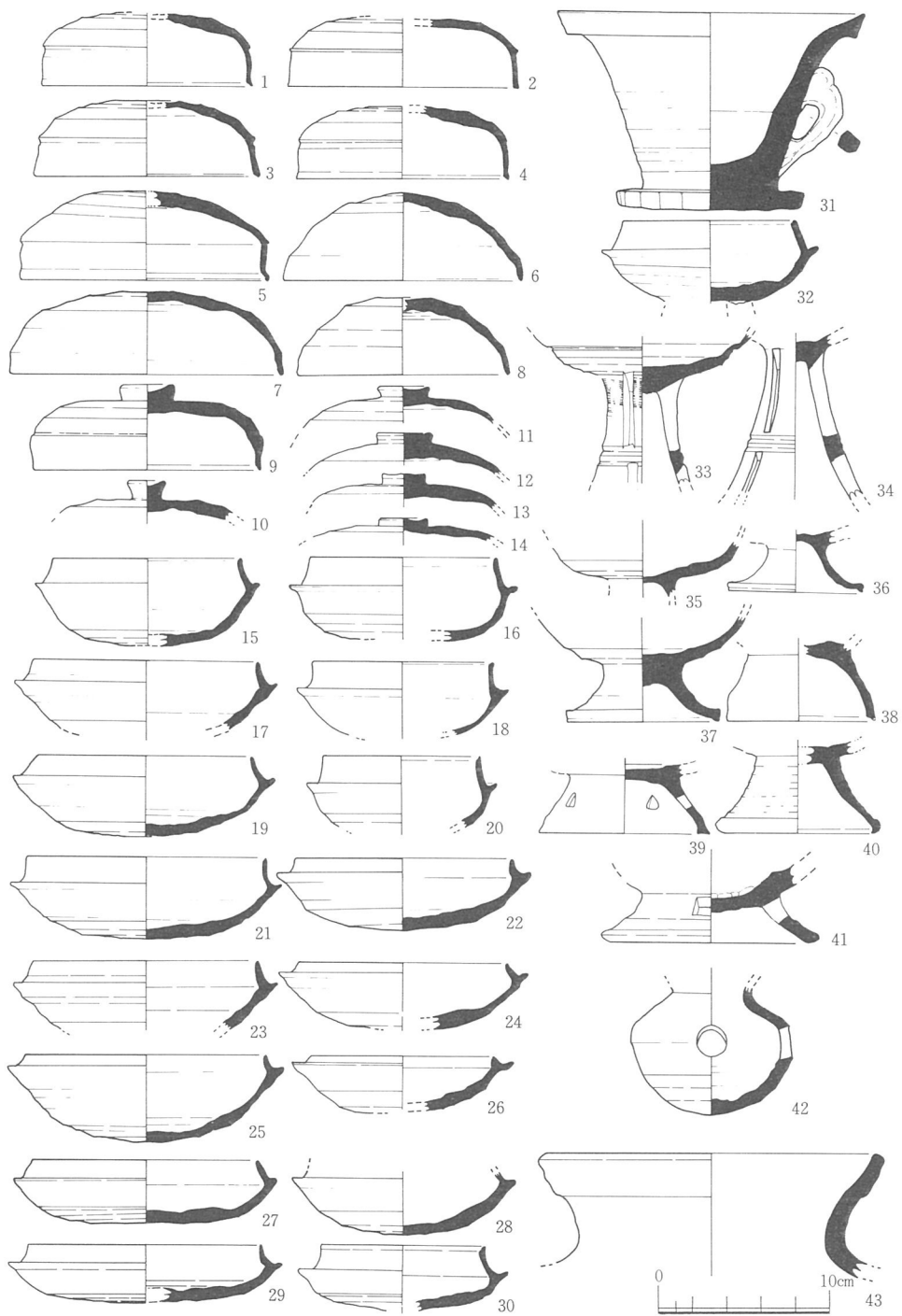


横断面②

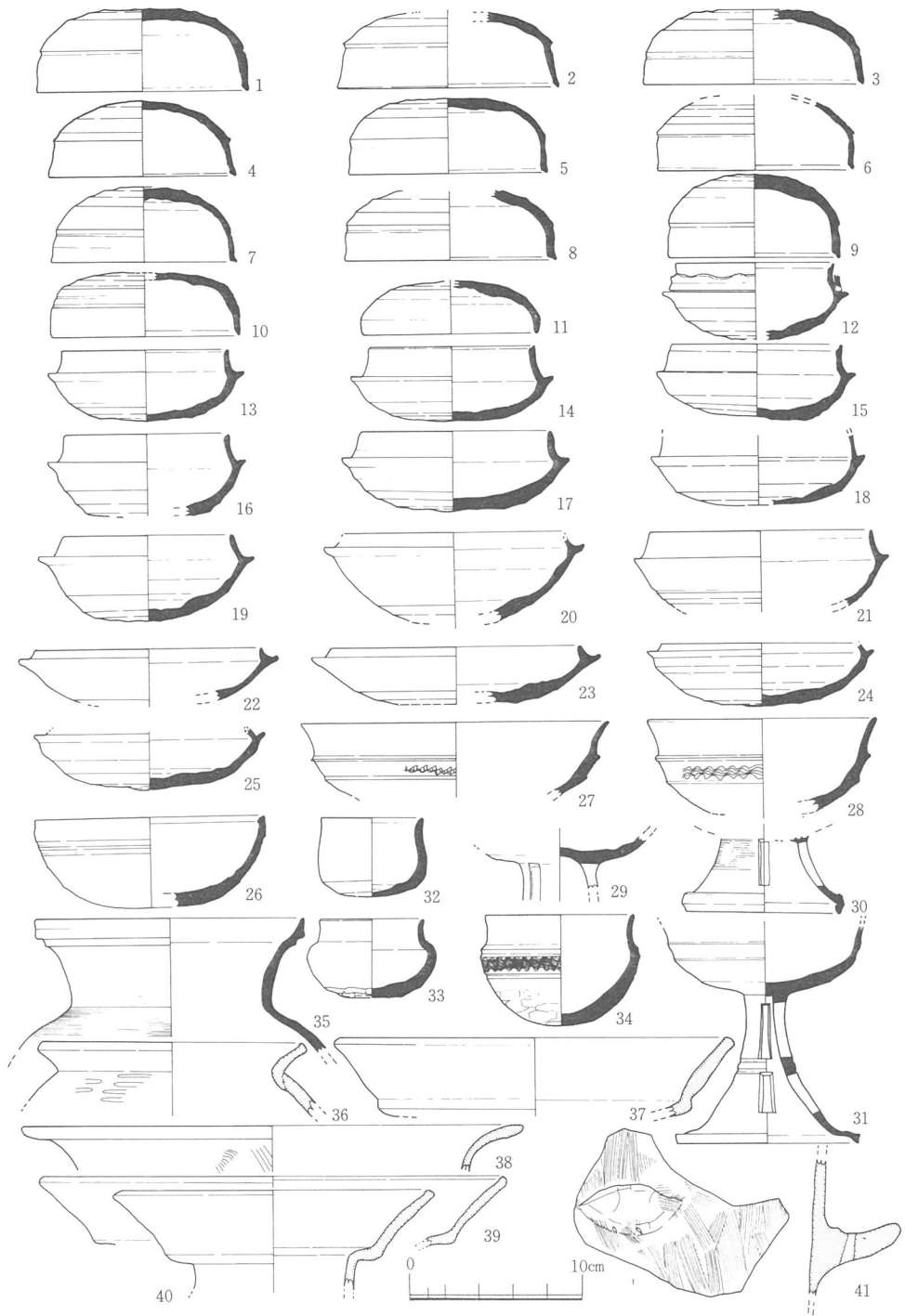
1. 2.5Y6/1黄灰色粘土
2. 2.5Y6/1黄灰色粘質土
3. 2.5Y7/1灰白色砂質土(耕作土)
12. 2.5Y6/1黄灰色砂質土
13. 2.5Y6/2灰黄色砂質土(耕作土)
14. 2.5Y7/1灰白色砂質土(青灰色砂礫混り)
15. 2.5Y7/2灰黄色微砂土
16. 2.5Y6/1黄灰色粘質微砂土
17. 2.5Y5/1黄灰色粘質土(ハサハサ)
18. 灰白色微砂
19. 砂礫混り橙味の灰土(水田畔畔)
20. 灰色砂質土(水田開溝)
21. 地山層(5Y7/2灰白色砂礫層)
22. 2.5Y7/8黄褐色砂礫層
4. 2.5Y7/2灰黄色こぶし大の礫混り砂土
5. 2.5Y7/2灰黄色微砂・礫混り土
6. 2.5Y6/4浅黄色細砂土
7. 2.5Y6/1黄灰色粘質土
8. 2.5Y7/4浅黄色微砂土
9. 2.5Y7/3浅黄色微砂混り砂土
10. 2.5Y5/1黄灰色粘質土
11. 2.5Y1/3浅黄色微砂土

6-OS・流路

第55図 溝 4 断面図



第56图 溝4出土遺物実測図



第57图 落込み499他出土遺物実測図

ている。これらの遺物は南北に走る水路に広く分布しており、その分布によっては調査時に識別し得なかった各流路の時期差を示している可能性もなくはないが、現状の分布をみる限りでは各地点とも、上層下層ともに新古の区別なく出土している。平安期以前の遺物はどちらかといえば下層に多く認められた。新しい時期の遺物には瓦質の摺鉢のほか、内傾する口縁に数状の横線を巡らせた瓦質の羽釜、玉縁状の口縁を持ち、粗い叩き目を施した湊焼きと呼ばれる大型の甕などが上層を中心に出土している。

水路の開削時期については平安期までは遡る可能性があり、その下限については16世紀代頃と考えられる。須恵器をはじめとする多量の遺物がある際に埋め込まれたものかどうか明らかでない。

500—O S（第58～60図、図版十五・三七）

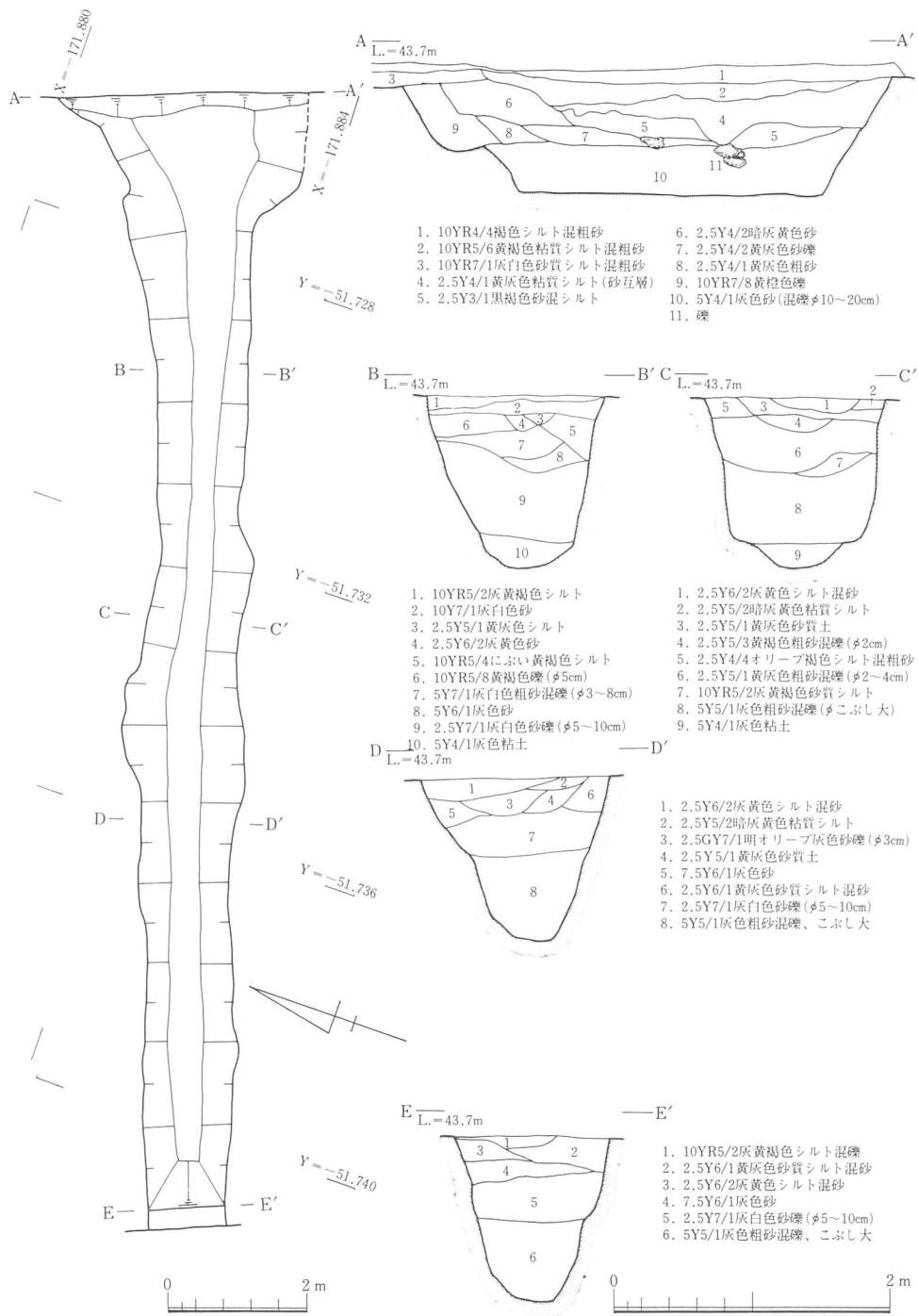
II区北端付近で調査区に直行する形で検出した。走行方位は約N-75°-Eである。溝幅は西端から約14mの間は1.10～1.30mを測るが、東端では3.28mを測る。溝の底のレベルは東端でT.P.42.60m、西端で42.30mを測ることから東から西へ流れていたと思われる。

断面形はU字形を呈する。埋土は大きく3層に分かれる。上層は褐色系の砂質シルト層で、中層は砂礫を多く含むシルト層、下層は礫層である。一部礫層下に灰色粘土層がみられる。このことから一定期間流路としての機能を持っていたことがうかがわれる。また、礫の堆積状況から急激な堆積であったと思われる。

遺物の多くは中層及び礫層中から出土した。古墳時代後期の甕（第60図16）は、最下層の粘土層から出土した。

出土遺物（第59・60図、図版三七）

1～3は土師器杯である。1、復元口径21.0cm、器高3.7cm。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外面の上部半分に横ナデを施し下部をヘラケズリする。内面に一段の暗文を施す。2、復元口径18.2cm、器高2.8cm。外面端部は、1ほど丸くおさめていない。口縁部に一条の浅い沈線を巡らせる。内外とも摩耗のため調整は不明である。3、復元口径13.2cm、器高3.5cm。口縁端部は丸く内傾させておさめる。口縁部外面に横ナデを施し、体部に指圧痕が見られる。底部外面および内面は、摩耗のため調整は不明である。4～8は須恵器杯である。4・5は無高台のタイプ、7は高台の付くタイプである。4、復元口径14.0cm、器高3.9cm。底部外面にヘラケズリを施す。5、復元口径13.5cm、器高4.4cm。体部外面の底部より約1/3までにヘラケズリを施す。6・7は高台の付くタイプと思われる。6、復元口径14.4cm、器高3.7cm。7、復元口径13.4cm、器高3.6cm。いずれも内外面



第58図 溝500平面・断面図

に横ナデを施す。8、復元底径10.7cm、現存器高3.2cm。高台は、底部の屈曲部より内側に入り、やや外に開く形を呈する。底部の内外面共にヘラケズリを施す。

9～16須恵器壺である。9、底径8.2cm、現存器高1.9cm。高台は外に開く。底部外面にヘラケズリを施し、底部内面を不定方向のナデで仕上げる。10、復元底径8.6cm、現存器高1.5cm。底部外面にヘラケズリを施し、底部内面は未調整のまま残す。11、現存器高8.8cm、最大幅17.0cm、12、底径9.7cm、現存器高7.8cm。11・12は同一個体と思われる。頸部と底部を非常に薄く仕上げ、底面にヘラケズリを施す。13、復元底径8.6cm、現存器高5.5cm。高台は外に開く。底部外面および現存体部の下半にヘラケズリを施す。14、復元口径12.0cm、現存器高6.7cm。口縁部は外反し、端部を肥厚させ内側につまみ上げる。頸部内外面ともにナデを施す。肩部内面は同心円文叩きを施す。形態調整からみて横瓶の可能性もある。15、現存器高8.1cm、最大幅18.6cm。胴部は「く」の字状に曲がり、頸部は大きく外反する。16、復元底径11.0cm、現存器高5.0cm。高台は長く開き、端部を内側につまみ上げたような形を呈する。

17～20は土師器である。17、復元口径19.6cm、現存器高3.7cm。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。18、復元口径21.0cm、現存器高1.9cm。口縁部は外反し、一部を肥厚させる。端部に内傾する面をもつ。19、復元口径25.8cm、現存器高1.9cm。口縁部は外反し、一部を肥厚させる。端部に外傾する面をもつ。20、復元口径33.6cm、現存器高3.9cm。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。内面に粗いハケを施す。

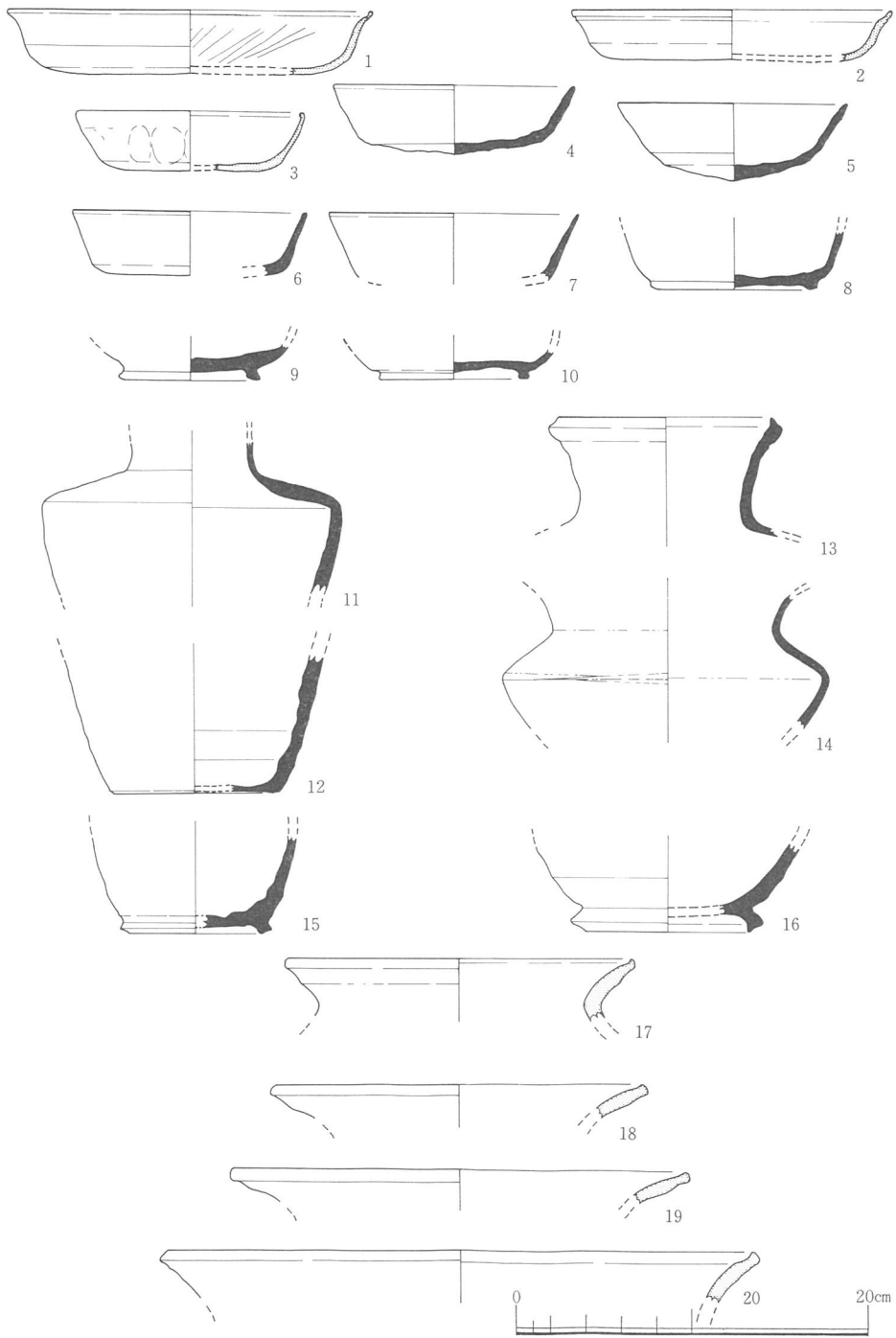
21～23は土師器蛸壺形土器である。21、復元口径5.4cm、器高14.5cm、復元最大径（外径）7.6cm、同（内径）2.3cm。鈕内径2.3cm。鈕部は突出し、指オサエとナデにより成形する。胴部外面は摩耗のため調整不明、内面に指頭圧痕がみられる。22、現存器高3.8cm、鈕内径1.2cm。鈕部から肩にかけてはなだらかである。肩部の張るタイプと思われる。23、現存器高1.3cm。

24は須恵器片口壺である。現存器高8.0cm。肩口の途中より欠損している。口縁端部をやや丸く面をもたせ、内面に強いナデを施す。

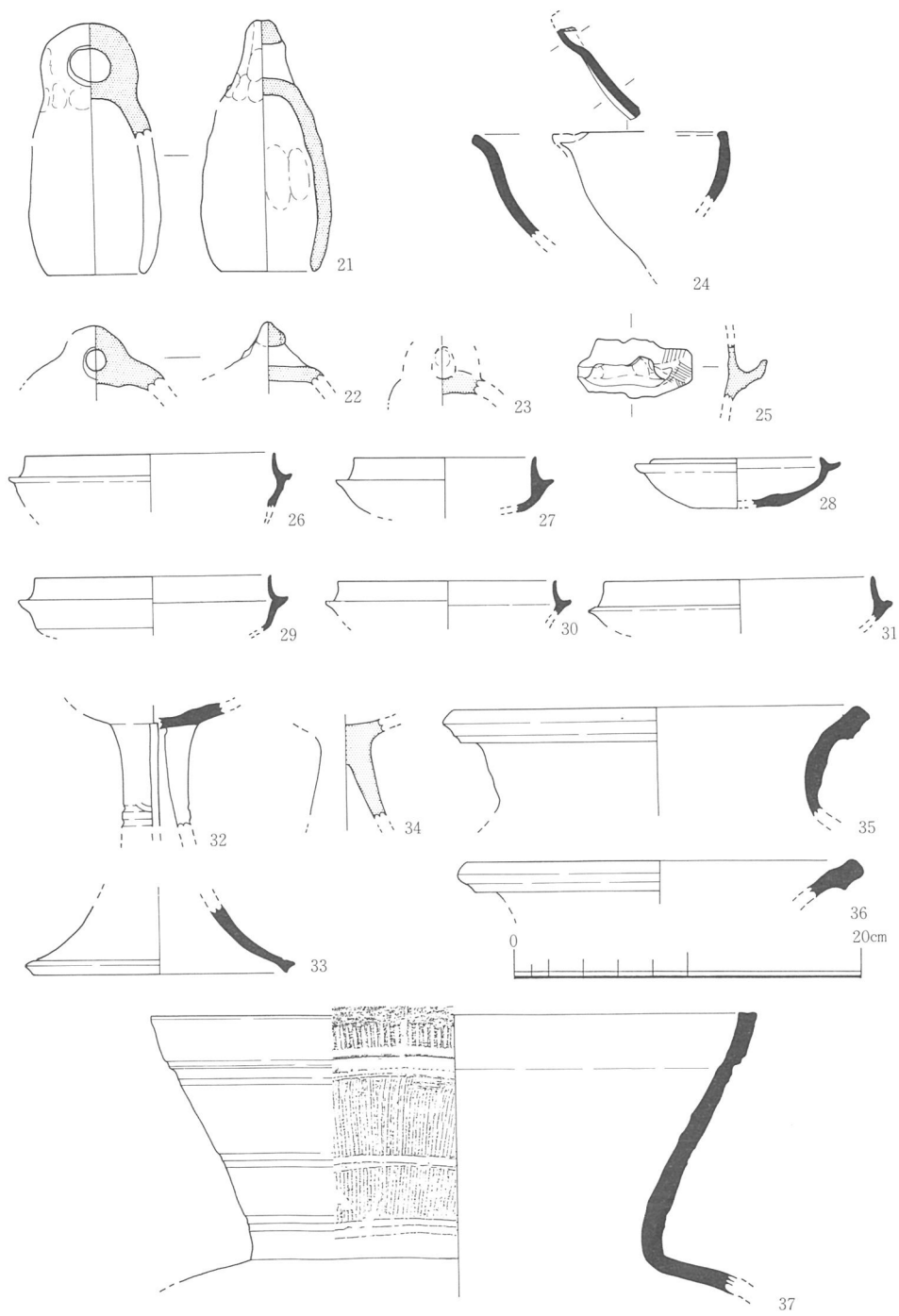
25は土師器把手付き鍋である。現存器高3.2cm、胴部径は25cm前後になると思われる。胴部外面に粗いハケを施す。

26～31は須恵器杯である。復元口径はいずれも9.8cm～15.8cmの範疇に含まれる。

32・33は須恵器高杯である。32、現存器高7.0cm。長脚二段透かしの上段部に当たる。二方向に透かし窓を設け、脚部の中央に二状の凹線を巡らせる。33、復元脚部底径15.6cm、



第59图 溝500出土遺物実測図(1)



第60图 溝500出土遺物実測図(2)

現存器高4.0cm。脚端部を上下方向につまむようにし、面を作る。端部外面に、浅い凹面を巡らせる。

34は土師器高杯である。現存器高5.8cm。杯と脚部の接合部外面に工具の痕を残す。脚部内面に絞り痕が見られる。

35～37は、須恵器甕である。35、復原口径23.4cm、現存器高6.4cm。口縁は外反し、端部を長方形に肥厚させ、外面に強いナデを一回巡らせる。36、復原口径23.6cm、現存高2.1cm。口縁端部を長方形に肥厚させ、外面に強いナデを二回巡らせる。37、口径50.0cm、現存器高32.2cm。口縁部は、緩やかなS字状に外反する。口縁部を凹線により4区に分け、上段に刺突文を2・3段目には縦方向のクシメ文を巡らせる。また図示できなかったが、同一個体と思われる底部および体部の破片も多数出土している。

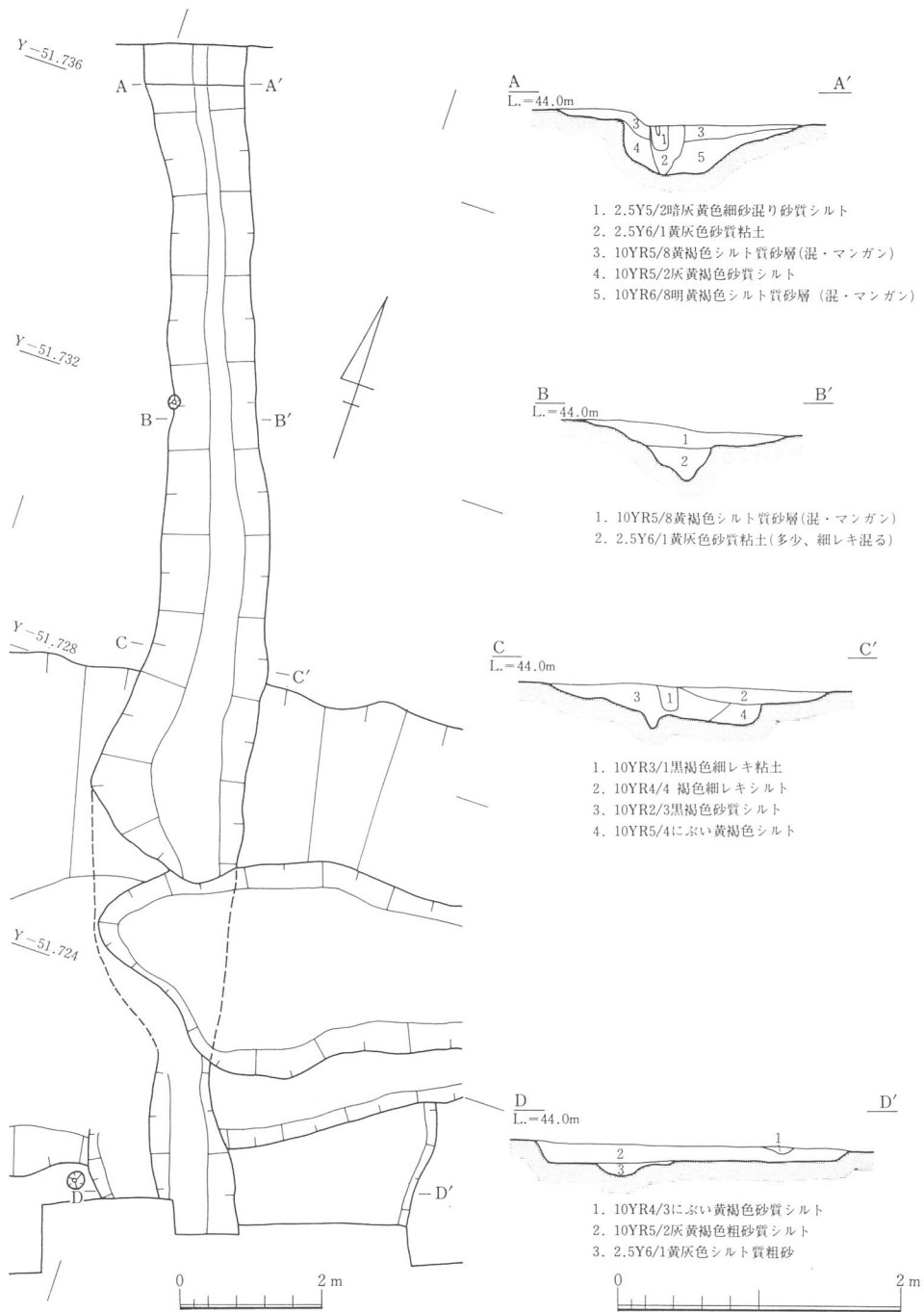
出土遺物には、古墳時代後期に比定されるものもみられたが、その大半は奈良時代後半にかけてのものであった。埋土の堆積状況からその時期にこの溝の機能は停止したようである。

563—O S（第61図）

563—O Sは、II調査区の北側付近で500—O Sの約13m南に、並行するかたちで検出した。幅約0.7～1.0m、深さおよそ0.15mを測る。

堆積は大きく2層に分けられる。上層は黄褐色系の砂混じりシルト層、下層は灰黄褐色系の砂質シルト層である。

遺物は1点も検出することができなかった。そのため時期を決定することは難しい。ただ、563—O Sは562—O Rを切っていること、東側で中世の攪乱をうけていることや500—O Sに並行していること等から、奈良時代後期からそう遠くない前後の時期に位置するものとみられる。



第61図 溝563平面・断面図

3 鎌倉～室町時代

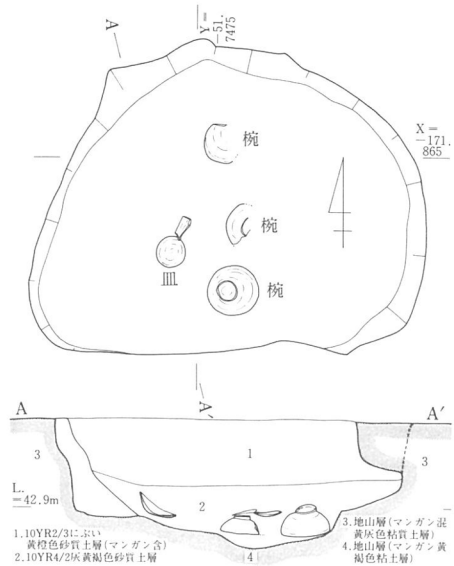
鎌倉時代から室町時代に属する遺構は、II～III調査区で水田と畦畔があり、土坑やピット群はI調査区の方に多くみられる。特にI調査区の南寄りには個々の時代を特定することは困難なもの、集中的に該期のピット群が検出されている。この中には真北方向と古墳時代建物の方向に並ぶ3～4個のピット列が認められた。確実な建物としてのまとまりは抽出できなかったものの、該期の建物（群）があったと思われる。

土坑他

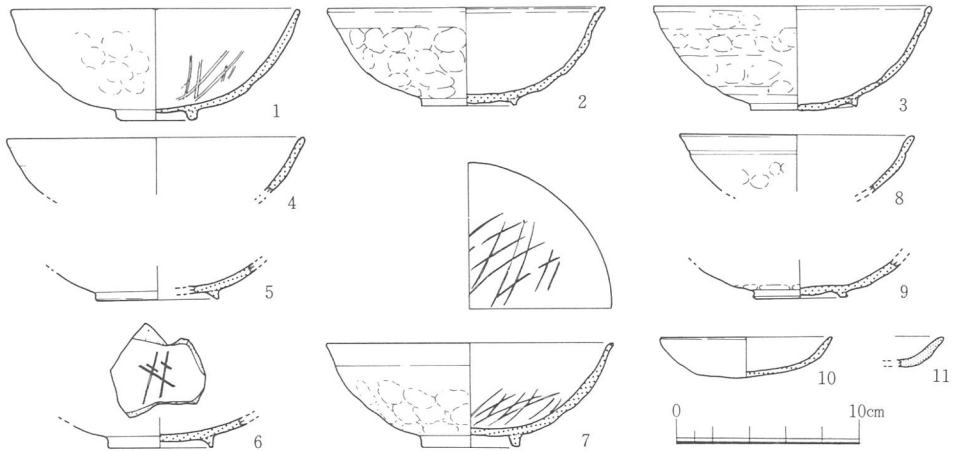
63—〇〇（第62・63図、図版二二・三八）

I調査区18PN付近で検出された土坑である。長径1.1m、短径0.9～0.8m、深さ30～35cm前後を計る。平面形は、楕円形を呈し底部は中央付近で浅いU字形を呈し、一部袋状になっている。

埋土は概ね2層に大別でき上層は黄橙色の砂質土で、下層は黄褐色砂質土である。下層より瓦器碗・皿が底面に接地して出土した。土器はほぼ完形で出土した碗2個を除くと破片、もしくは欠損品である。



第62図 土坑63平面・断面図 (1/20)



第63図 土坑63出土遺物実測図

上層を素掘溝が切っており、出土した土器は瓦器椀、瓦器皿がある。鎌倉時代掘立柱建物に伴ったと考えられる土坑であり、I調査区南半に想定される建物（群）の時期を考えるポイントとなる土坑である。

土器1～9は、瓦器椀である。10は、瓦器皿である。風化が進み、炭素が剥がれているものがある。。暗文は、1・6・7に観察される。格子・螺旋暗文を施し、はり付けの高台はしっかりしている。

792—〇〇

792—〇〇はⅢ区中央付近で検出した長辺3.2m、短辺2.0mを測る、平面隅円長方形を呈する土坑である。深さ約0.1m。埋土は灰褐色系の砂質シルトの単一層である。

埋土に須恵器片を若干含む。時期ははっきりしないが、埋土が中世の包含層に近似することや畦畔状遺構下に当たるところに位置することから耕作に関連した遺構と思われる。時期も13世紀以降に比定されると考えておきたい。

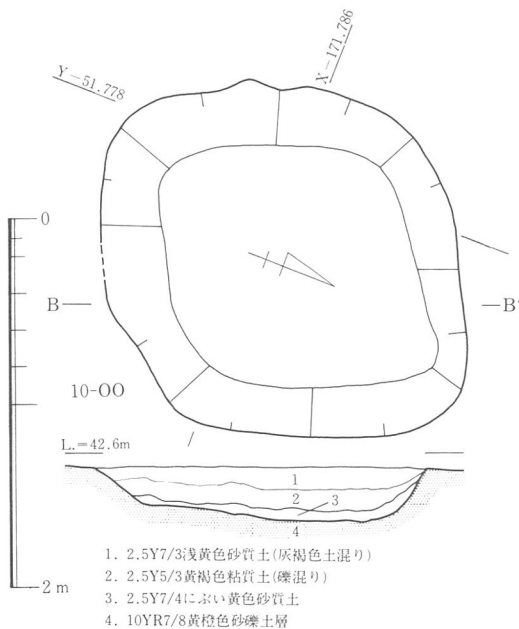
10—〇〇（第64・65図、図版二一・三八）

I調査区北寄りの大型の掘立柱建物 409—〇Bのすぐ西に接して検出された隅円方形を呈する浅い土坑である。南辺の中央付近に小さなピットが切り合っている。一辺2m前後、深さ0.2m～0.3mを測り、底面は南から北へわずかに傾斜している。

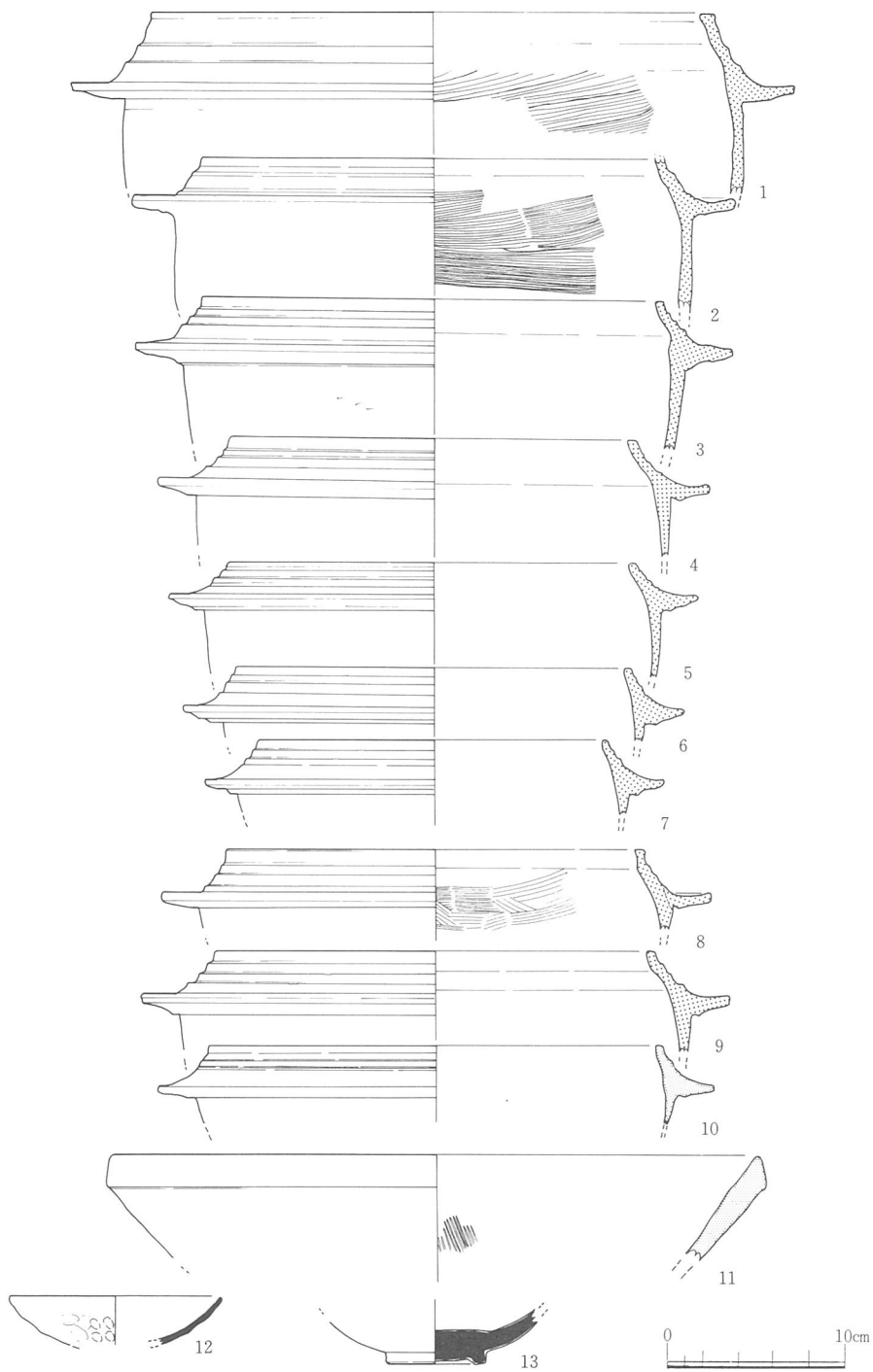
埋土は3層に分かれるが、黄褐色系の砂質土を基調とし中層に礫を混じえる。土坑内には瓦質羽釜を主とした土器溜りが、北東のコーナー付近で20cm大の角礫とともに検出されている。出土遺物には瓦質の羽釜・鉢、瓦器椀、青磁椀等があるが、第65図10はI調査区南寄りのピット群中の出土遺物である。

羽釜は口径32～20cm程度まで大小あるものの、いずれも口縁の立ち上がりが内傾し、2～3条の横線を外面に施している。青磁椀は内外面とも釉が厚い。

これらの遺物はいずれも15世紀代のものと考えられ、土坑の時期を示すと思われる。



第64図 土坑10平面・断面図



第65图 土坑10出土遗物实测图

641—O X (図版五)

641—O XはII区の北側500—O Sの南側、現在の地割りに平行する中世以前にカットされたと考えられる段のところで検出した。長径2.4m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。遺構の長径は調査区の長辺にほぼ平行し、南側と北側のレベル差は北側が-0.11mを測る。埋土は灰色系砂質シルトと、10~20cm大の礫が詰まっていた。

遺物は若干の須恵器片を検出した。

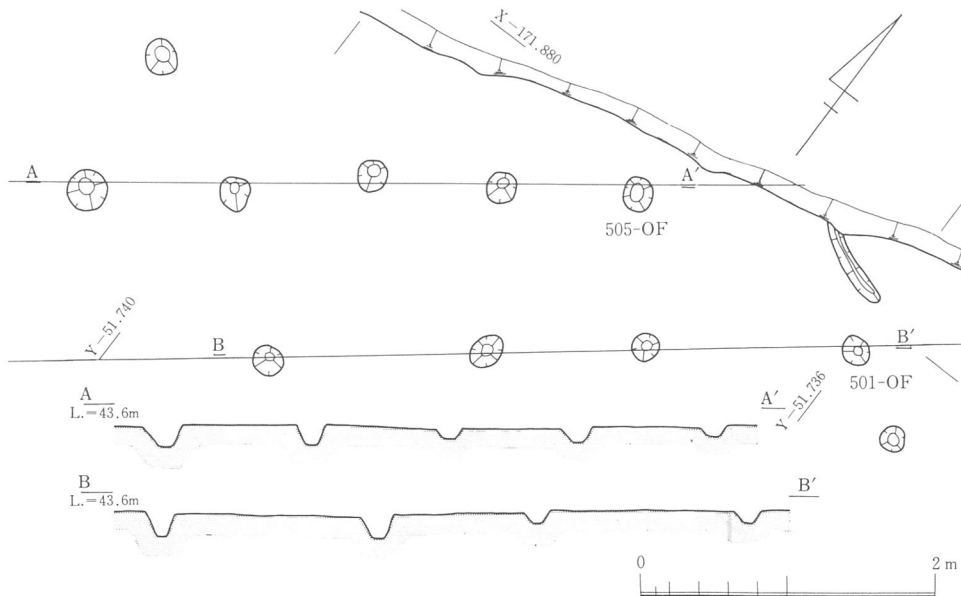
641—O Xは、埋土や位置から中世に比定され、耕作に伴う暗渠として機能していたものと考えられる。

柵列

505—O F ・ 501—O F (第21・66図、図版五)

505—O F ・ 501—O FはII調査区の北西角で2列に並んで検出した。505—O Fはそれぞれほぼ0.9m間隔にN-53°-Eに並ぶ5個のピットからなる。調査区北外に続く可能性を持つ。柱穴は径0.2m前後、深さ0.1~0.15mを測る。

501—O Fは、505—O Fの南1.1mの地点にほぼ平行して並ぶ4個のピットからなる。間隔は1.1~1.5mとばらつきをみせる。柱穴は、径0.18~0.20m、深さ0.10~0.20mを測る。



第66図 柵列505・501平面・断面図

埋土は褐色系の砂質シルトである。

いずれの柵列も掘形は明確でなく、遺物も一点も検出できなかったことから人為的に掘られたものかは疑問を残している。時期も明確でない。

中世耕作関連遺構（第21図、図版四～六）

II調査区・III調査区で、中世の耕作に伴う鋤溝と考えられる小溝を数状確認した。また、III調査区では畦畔状の遺構や、耕作に伴うと考えられる土坑などを確認した。

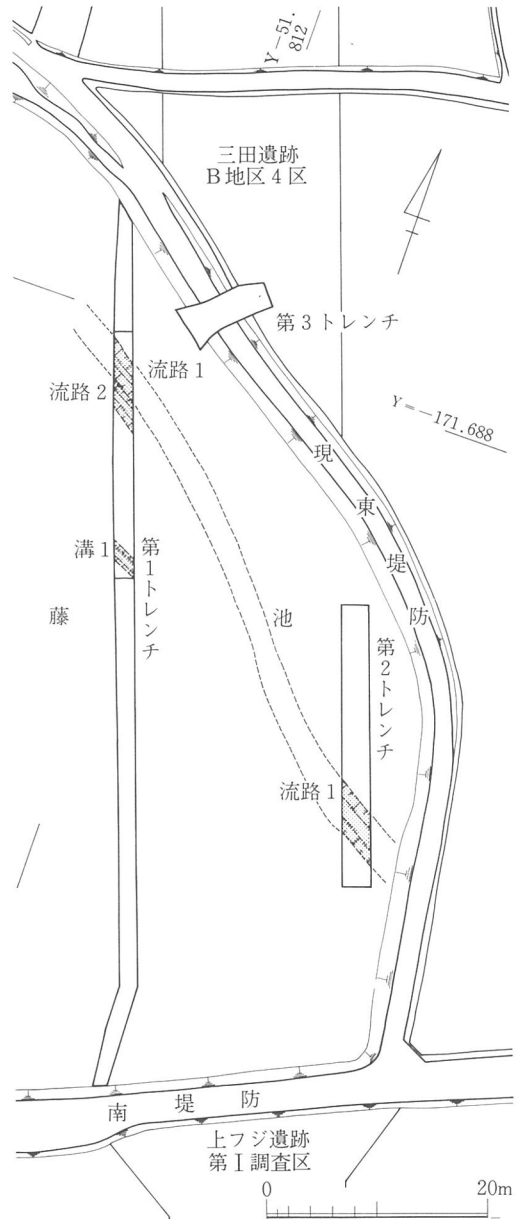
畦畔の遺構（843・844—O Z）はIII区の中央部において検出した。調査区に平行するものと直交するものがある。幅は0.6m前後である。III区南端の調査区に直交するものは地山を削りだすことによって作られている。比高差は現在0.05mを測り、後世の掘削を受けているものと考えられる。これに平行して幅0.2cmの溝を検出した。他のものは、現在では比高は確認されず、遺構面での地山の変色に基づいたものである。これらの畦畔状遺構は、現在の地割りに平行するものである。

時期決定を行ううえで明確な資料を検出することはできなかったが、包含層（中世耕作土層）出土遺物からみて13世紀後半頃から上フジ遺跡周辺の耕地化がおこなわれると考えられ、本遺構は13世紀後半以降のものと推定される。

第V章 藤池地区の調査

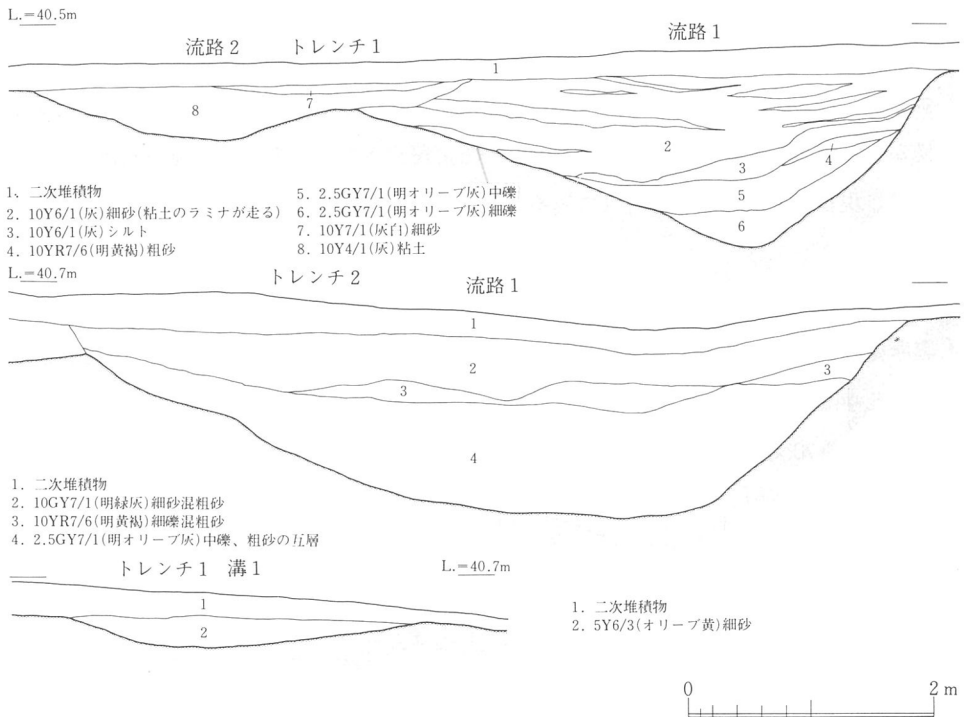
第1節 池内の調査（第67～69図、図版二四・三五）

藤池地区における池内の調査直前の状況は、農閑期にあたるため水を落としてほとんど干上がった状態であった。岸部分は砂、岸から池床への移行部には粘土の堆積が認められ、池床部には砂、粘土を主体とする堆積物が沈澱、またベース面から遊離した砂礫の二次堆積も部分的に認められた。岸部分を中心に須恵器、土師器、瓦器碗等の細片が僅かに散布していた。調査は磯之上山直線建設予定地内にかかる藤池擁壁部分直下全面、及び池床内を対象としてトレンチを設定し、断続的に行った。洪積層までの掘削は主として機械により、細部は人力で掘削し、洪積層は必要に応じて深掘した。擁壁部分直下の調査は幅約2m、長さ100mにわたり、擁壁工事にかかる地区全面の掘削を行い、洪積層の検出をもって最終面とした。これを第1トレンチと呼称する。その結果、中央部より南東では、池底に堆積した土砂を排土すると、中位段丘を形成している洪積層と認められる砂礫層が検出され、遺物・遺構の存在は全く確認されなかった。中央部より北西では堆積物を除去した段階で、砂礫層上面をベー



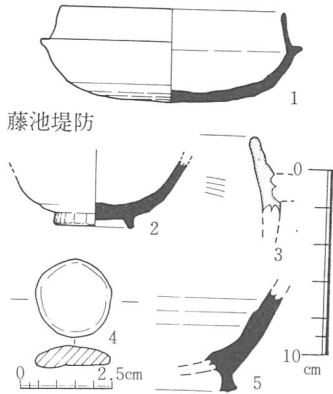
第67図 藤池調査地トレンチ位置図

スとして東西方向に延びる溝状の落ち込みが観察されたため、この地点を含む長さ28mの範囲にわたって池床面下約2mを深掘し、南西壁面の断面観察を行った。溝状の落ち込みを溝1と呼称する。溝1は断面に対して斜交しているため、計測値は実際の幅より長くなっているが、幅2.8m、深さ0.25mで、10Y5/2（オリーブ灰）粘土を埋土としている。埋土の一部には細砂の薄層が認められ、流水の痕跡をとどめる。埋土からは須恵器、土師器破片が検出された。その北西15mには規模のやや大きい2条の落ちが認められた。これらの落ち込みは南北に連続して断面が観察され、埋土からいずれも流路の痕跡と認められた。北側の落ちを流路1、南側の落ちを流路2と呼称する。流路2は流路1の埋没後に、その一部を切って形成されている。流路1の規模は残存幅4.8m、深さ1.4m、底の標高は38.7mである。埋土は下部より灰色系の細礫、中礫、シルト、上部に10Y6/1（灰）細砂が堆積している。この細砂層から土師器細片が出土している。流路2の規模は幅3.6m、深さ0.5mで、底の標高は39.6mである。埋土として10Y4/1（灰）粘土が堆積しており、最上層に10Y7/1（灰白）細砂が認められた。埋土には流木等の植物遺体が多量に混入していたが、遺物は確認されなかった。これら2条の流路は、溝1と同様、東西方向に走行する



第68図 藤池内流路1・2、溝1断面図 (S=1/60)

藤池流路 1



藤池堤防

第69図 藤池地区出土遺物

ものと思われた。流路1は明瞭に多量の流水の痕跡をとどめる。それに対して流路2は規模も小さく、滞水状態であったと思われる。

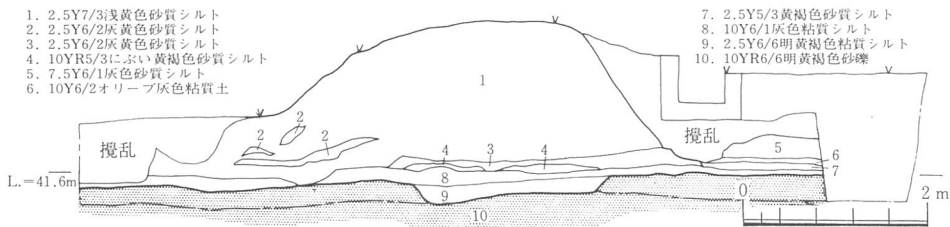
擁壁部直下で検出された流路の方向性を確認するため、池床内に第2トレンチを設定した。流路は幅の狭い検出範囲ながらも概ね東西方向という方向性が把握できたため、その延長上にかかる位置を想定して第2トレンチを採入した。二次堆積物を除去すると砂礫層が検出されたが、擁壁部直下より締まりが不良で、やや軟弱である。

これをベースとして流路1の延長部が検出された。規模は幅6.8m、深さ1.4mで、底の標高は38.8mである。埋土は第1トレンチの状況と同様、下部より灰色系の粗砂、中礫等の互層がみられ、流水の痕跡をとどめている。上層部の10Y7/1（明緑灰）細礫混粗砂からほとんど摩耗の認められない須恵器杯身の破片、土師器破片が検出された。

第2節 池堤防の調査(第69・70図、図版二五)

調査前の藤池堤防は、池の南堤が舗装道路となっている。北・東・西辺は「コ」字状に堤防が巡る。また、随所に内側をコンクリートで護岸を施したところが見られた。東辺の堤防は、現在里道として利用されている。第3トレンチを設定した周辺の標高は、42m前後を測る。

藤池堤防の基底部幅は、調査箇所においてはおよそ6mを測り、元の堤防の一部を掘削し護岸施設を設けていることを考えると、現状より幅広であったと推定される。地山面は、河岸段丘中位面に位置し、凹凸がみられる。地山面上には三田遺跡から続くと思われる中世包含層（第70図8層）が存在する。堤防の構築方法は、中世包含層上に20cmにわたって



第70図 藤池堤防横断面図

互層に築かれているが、それ以上はブロック土による構築で明確な版築工法などはみられなかった。

遺物はおもに中世包含層からの出土で、盛り土内からの出土はまれであった。5は、須恵器壺である。高台は短くばち形を呈し外反する。高台部が歪んでいるため高台径を復原できなかった。3は、瓦質の羽釜である。胎土は粗く褐色を呈する。炭素の吸着は不良である。4は、磨製の石製品である。直径2.1cm、厚さ0.5cmを測る。黒褐色系の石材を加工しており基石と思われる。その他にも瓦器片が認められる。

第3節 小結

藤池地区池内の調査の結果、1条の溝と2条の流路が検出された。流路1は前述の如く多くの流水量を有すると思われる谷地形の痕跡であろう。藤池周辺の溜池の分布状況から、藤池を含めたこれらの池は、古い谷地形を利用して構築されたと推定されているが、流路1はこの谷地形の流水痕跡である。出土した須恵器から、流路1は少なくとも6世紀初頭より以後に埋没したと考えられる。調査区の北西に位置する三田遺跡、南東に位置する上フジ遺跡からは、5世紀末から7世紀初頭にかけてほぼ同時期に営まれた竪穴住居、掘立柱建物等によって構成される集落跡が検出された。藤池池内で確認された流路1がこれらの遺跡と同時期に存在していたならば、流路1の示す谷地形が三田遺跡と上フジ遺跡の集落の境界となっていたであろう。

流路2は流路1の埋没した後の滞水状態を示しており、この両者の相違は谷地形内の埋没過程の差異を表していると考えられる。

溝1は1トレンチで断面を観察したにとどまり詳細を把握できなかったが、周辺の古墳時代後期の集落と同時期と仮定した場合、上フジ遺跡の南東に位置する二俣池北遺跡では、谷地形を利用した水田が経営されたと解釈できる古墳時代後期の溝状遺構が検出されており、^①本例も同様に谷水田が経営されていた可能性を指摘できよう。

藤池の構築時期は明確にできなかったが、13世紀末の瓦器を含む中世包含層形成以後に、築堤作業が行われたことが確認された。

註 ①昭和62年度本協会調査結果による。

第Ⅵ章 総括

今回の調査は主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設の事前調査として、道路幅員20m、長さ200mの長大な調査区を設定して行われた。さらに擁壁工事に並行して幅2mの調査も行っている。成果としては古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居址や掘立柱建物、溝を中心とする多量の遺構と遺物、鎌倉時代以降の建物や土坑、中世以降の水田址などを検出している。

本遺跡の遺構、遺物を検討するには、北に接する三田遺跡や南の二俣池北遺跡の調査成果を加味した上で集落や水田の広がりを広範囲な視野にたって検討していく必要があるが、ここではひとまず、当該地区の調査成果を中心に時代順に概観しておきたい。

1. 先土器時代

この時期の遺物が確認された近隣の遺跡としては、本遺跡と同様に段丘面に立地する山直北遺跡^①と三田遺跡^②があげられる。前者からは舟底形石器と剥片等が、後者からは剥片がそれぞれ検出された。いずれも包含層からの出土であり、原位置を保ってはいない。三田遺跡の場合には、出土地点から判断して数箇所のブロックが存在した可能性が考えられる。

和泉地方の中で本遺跡と同様に、国府型ナイフ形石器が確認された遺跡として、堺市野々井遺跡^③、和泉市大園遺跡^④、万町北遺跡^⑤、伯太北遺跡^⑥、岸和田市西山遺跡^⑦、琴山遺跡^⑧、葛城山頂遺跡^⑨、等があげられる。

特に西山遺跡は、本遺跡の西方約600mに位置し、牛滝川左岸の岡山丘陵先端部に立地している。また西山遺跡出土の国府型ナイフ形石器は形態の点で本遺跡出土資料と類似していた。遺跡立地に違いが認められるが、先述した山直北遺跡や三田遺跡および本遺跡ときわめて近接した位置にある。これらの点から判断して、(古)牛滝川の中流域を一時期の領域とする集団の存在が想定される。同様な傾向は、琴山遺跡の立地する(古)春木川流域についても考えられ、今後周辺部で資料の発見される可能性が大きい。

以上のように本遺跡で検出された先土器時代の石器類剥片、和泉地域の段丘面に立地する各遺跡において、今後同時期の遺物がより確認される可能性を示唆したものと言えよう。資料の蓄積と同時に、当時の集団領域とその関係を解明する作業が残されている。

2. 縄紋時代

本遺跡で検出された石器類は、その特徴から判断してほとんどが後期に属すると考えられる。土器が未検出のため、細別期については不明瞭であった。石器類の散漫な出土状態（第16図）から見て集落中心部分とは考えられず、周辺に集落の存在が予測される状況であった。本遺跡の北側に位置する三田遺跡^⑩においても、後期前葉の土器が1点と多数の石器類が出土しており、ほぼ同様な状態を示している。

和泉地域にあっては、従来から後期以降遺跡数の増加が顕著である点に注目されている。しかし後期後半から晩期前半にかけての遺跡数の減少が指摘されてきた^⑪。近年の調査において、この時期に属する遺跡がいくつか確認された。本遺跡の北に位置する山ノ内遺跡^⑫と軽部池西遺跡^⑬がその代表と言える。両者とも本遺跡と同様に、府道磯之上山直線に伴う調査によって明らかとなった。特に山ノ内遺跡の実態は、和泉地域の縄紋時代後期後半（元住吉山Ⅰ式から宮滝式）を知るうえで極めて重要な内容を包括している。その詳細については、報告書に委ねたい。

このような状況の中で、本遺跡から石器類のみとは言え、後期と考えられる遺物が検出された点が重要である。すなわち地形的に隔絶された領域（牛滝谷）内で、遺跡の内容（時期幅、遺物量等）に違いが認められた。この事実は、今後領域の範囲を解明する場合と、同一領域内での集団の展開を考える際の重要な手掛になるとと思われる。

註

- ① 「山直北遺跡発掘調査現地説明会資料」（財）大阪府埋蔵文化財協会 1987年
- ② 『三田遺跡発掘調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第15輯 1987年
- ③ 松藤和人「第2章第1節土器以前の文化」『大阪府史第1巻』大阪府 1978年
- ④ 「大園遺跡発掘調査概要Ⅶ」大阪府教育委員会 1982年
- ⑤ 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅲ』和泉丘陵内遺跡調査会 1984年
- ⑥ 註④ 文献参照
- ⑦ 鈴木重治「第1章岸和田のあけぼの」『岸和田市史第1巻』岸和田市 1979年
- ⑧ 註⑦ 文献参照
- ⑨ 註⑦ 文献参照
- ⑩ 註② 文献参照
- ⑪ 渡邊昌宏「泉州の縄紋時代」『青海波3号』泉州の自然と文化財を守る連絡会議 1986年
- ⑫ 註① 文献参照
- ⑬ 『軽部池西遺跡発掘調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第11輯 1987年

3. 古墳時代

古墳時代の遺構として、竪穴住居址・落込み・自然流路がある。ここでは、5世紀後半から6世紀前半の時期を考えてみたい。

竪穴住居址から出土した須恵器はI型式5段階にあたると思われ、住居には5世紀末の年代があたり得られる。落込み及び自然流路は、上層からはII型式の遺物の出土をみるが下層からI型式2ないし3・4段階の須恵器、あるいは韓式系土器の範中に入る？と思われる甑の破片などが出土している。流路は東山丘陵から派生する開析谷の地形そのもので、この時期にはまだ谷としての機能を果たしている。藤池で確認した流路も、開析谷の一部で構成されていると思われる。落込みは谷の中に構築されており、何等かの遺構であろうが調査区外に延びているため、その性格や開析谷の規模は明らかにできない。しかし、上層も含めて須恵器を中心としたかなりの遺物が出土しているので、谷の対岸あるいは中程に窯跡・灰原などの遺構が存在する可能性がある。

竪穴住居址は、8棟が検出され、その状況は散在している。住居址の平面形はすべて方形であり、4.6m～5.8mであるが168—ODのような小形住居で、竈を持つカマヤの様なものがあり、住居そのものかどうか検討も必要になる。また、これらの住居に伴ったと思われる土坑がある。

住居の規模は最大のもの5.8m、最小2.1mである。規模の違いは時期差でなしに屋の構造のちがいがらくと思われ等質的でなくややカマド側の辺が長い。8棟のうち全容がわかる4棟には火所の竈が付随している。竈はすべて北から東辺に認められる。

集落の占地は、二ツ池・藤池の開析谷に面していたと考えられ、西は牛滝川に向かって延びる縁辺までを想定でき、本遺跡と三田遺跡B地区の古墳時代集落とは北接した位置にある。また、集落は南方のII区の方には延びていない。II区からIII区にかけては風倒木？の土坑群があり、これらは集落の外である可能性がある。

また、三田遺跡とは同様な時期に集落が営まれており、位置的にも時間的にも同一空間を構成している。住居構造も住居内に明確な貯蔵穴・壁溝をもたず、竈構造も同一で、壁面を弧状に削り込んで壁面から左右に延びる袖部を馬蹄状に造っているなど、酷似している。さらに掘立柱式の建物も想定できるが、この時期に限定して明確に把握できない。また、周囲には土坑があり、これらに伴った可能性がある。住居内の埋土中からは少量の土器片以外出土していない。土坑内に完形土器あるいは、それに近いものがあり、貯蔵・保管の構造を有していた可能性をもつ。

これら集落は、5世紀末から6世紀初で構成を開始し、6世紀後半も数棟で構成され散在しているようだ。

4. 飛鳥・奈良時代～平安時代

第IV章で報告した通り、上フジ遺跡において、飛鳥・奈良時代～平安時代に至る遺構・遺物の出土を見た。ここではまず本遺跡の周辺の遺構のありかたについて考えてみる。

和泉地方に国府がおかれたのは757年と周辺諸国に比べ遅く、それまでの行政機関としては和泉監(716年)が存在した。国府は現在の和泉市府中町周辺に位置すると推定されている。しかし当時の集落跡は、今迄の調査ではほとんど確認されておらず不明な点が多かった。上フジ遺跡の位置する「山直谷」では比較的多くの奈良から平安時代にかけての遺構が検出されている。現在確認されている明確な遺跡では北側に位置する山直北遺跡がある。この遺跡は、昭和61年度に当協会が調査を行い現在整理中であるが、奈良から平安時代にかけての集落跡が確認されている。この遺跡から緑釉陶器の碗、皿、香炉、須恵器の硯などの遺跡の性格を考える上で重要な遺物が出土した。上フジ遺跡の北側に位置する三田遺跡でも奈良時代後期から平安時代前期にかけての遺構が確認されている。また南側に位置する芝ノ垣外遺跡では奈良時代後半の溝が検出されている。この溝は幅約1.4 m、深さ約1.1mと、今回検出した500—O Sに形状時期ともに類似したものである。

三田遺跡、芝ノ垣外遺跡の遺構はともに奈良時代後半と比定されるもので、現在のところ奈良時代前半の遺構が希薄であるが、このことは古墳時代後期の集落から、古墳時代後期末から奈良時代前半にかけての集落、そして奈良時代後半の集落へと、一箇所にとどまり長期の集落を営むのではなく、移動を行っているためとみられる。

以上が、上フジ遺跡周辺の奈良時代から平安時代にかけての概観であるが、次に上フジ遺跡における当時期の遺構について考えてみる。

掘立柱建物は、すぐ北側が谷地形となり平坦面の縁辺に位置している。また調査区の東側も谷地形となり西側も現地地形からの推定では約60mの平坦面の後に再び谷地形になると考えられる。このことからこれらの住居跡は、南から北にのびる舌状の台地状の北端に位置するものと見られる。集落の広がりには第II調査区の南半部で当該期の遺構が検出されなかったことや、第I調査区の北半部に当該期の掘立柱建物を構成する柱掘形が多くみられたことから、409—O Bの周辺から西側にかけて当時の集落が存在したとみられる。

次に溝について考えてみる。これらの溝は舌状の台地を横断する形で掘られている。埋

土堆積状態から流路状態にあったとみられる。水の走行方向は遺構各説の第Ⅳ章でも述べた通り500—O Sは東から西に向かうと考えられる。その水は東山丘陵から派生する谷からひかれたものとみられる。この溝の機能に関しては、集落を画する溝であるとか灌漑用の溝などがあげられるが、周辺に奈良時代後半の建物跡が認められなかったことや、出土遺物がそれほど多くなかったことから灌漑用水路であったと考えておきたい。

今後の課題でいえば現時点においては古墳時代の後期の集落から奈良時代の集落に推移する継続性が顕著には現れていないことである。これは新たな律令体制下に移行するにあたって集落の存続にも何等かの変化があったためであろうか。また、当時の地割りに関しても明確な資料を得ていない。今後の調査の進展に期待したい。

5. 鎌倉時代以降

中世以後の耕作に関連する溝・畦畔等は今回の調査区の全域に広がっている。この一帯が全面的に耕地化される時期についてはⅠ調査区北寄りの14世紀末～15世紀代に属する土坑10以後のことと考えられる。これ以前の遺構はⅠ調査区の北寄りのL字型に曲がる溝4、南寄りに集中する柱穴群中に想定される掘立柱建物と土坑63、Ⅱ区北寄りの柵列512・509などが認められる。

溝4の掘削時期と形態については評価の分かれる部分があるが、平安時代までは遡る可能性を持っている。現在の山直谷にみられる条里地割りに沿って検出されており、その継続期間や水路の浚渫の形跡をうかがうことのできる堆積などからみて、この地区における条里の施行と関連する溝である可能性が高い。この溝は15世紀以降の耕地化の際に完全に埋められている。

掘立柱建物の位置はⅠ調査区南寄りからⅡ調査区北寄りに限定されている。この地点に集中する柱穴群の広がりからみて、1ないし2家族体分の建物群とみられる。時期を特定することはできないが、散村的な短期間の集落であったと考えられる。

藤池の南側堤の築堤は調査所見から13世紀末を遡らないと考えられている。1885年測量の仮製地形図ではこの池は方形区画をもち、現存地割りに規制された形をしている。この地区の耕地化が15世紀段階以降に一つの画期を持つとすれば、少なくとも整った藤池の姿が形作られる時期の可能性を示唆するものかも知れない。

註 山直谷の条里と施行時期等については、当協会駒井正明の助言を得た。

第Ⅶ章 附 論

上フジ遺跡花粉化石等微化石分析

川崎地質株式会社

1. はじめに

当分析調査業務は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が川崎地質株式会社に委託して実施したものである。

当分析調査は、発掘調査に伴って露出した東壁、500—O S、562—O R遺構ならびに最終遺構面下より採取された試料を対象として、花粉分析、珪藻分析を行い、これらの結果(補注)より、地質層序、ならびに植生や水域の古環境の推定を行ったものである。

(補注)

第Ⅲ調査区においては、遺構の調査終了後に最終遺構面下の断割りを実施した。試料採取地点は、第Ⅲ調査区中央部の東側である。

2. 分析試料の数量

花粉分析を行った試料は32試料、珪藻分析を行った試料は、22試料である。ただし、両分析の抽出処理を行ったところ、化石の含有量が極少ないか、ほとんど無いものが、花粉分析で14試料、珪藻分析で19試料あった。

第1表 分析処理検出数・数量表

	花 粉 分 析		珪 藻 分 析	
	処 理 数	検 出 数	処 理 数	検 出 数
(1) 東 壁	8	6	8	1
(2) 500—O S	8	6	8	1
(3) 562—O R	6	3	6	1
(4) 562—O R	4	2	—	—
(5) 最終遺構面	6	1	—	—
合 計	32	18	22	3

3. 分析試料の採取地点・土層

分析資料の採取地点は、第98図の5地点である。

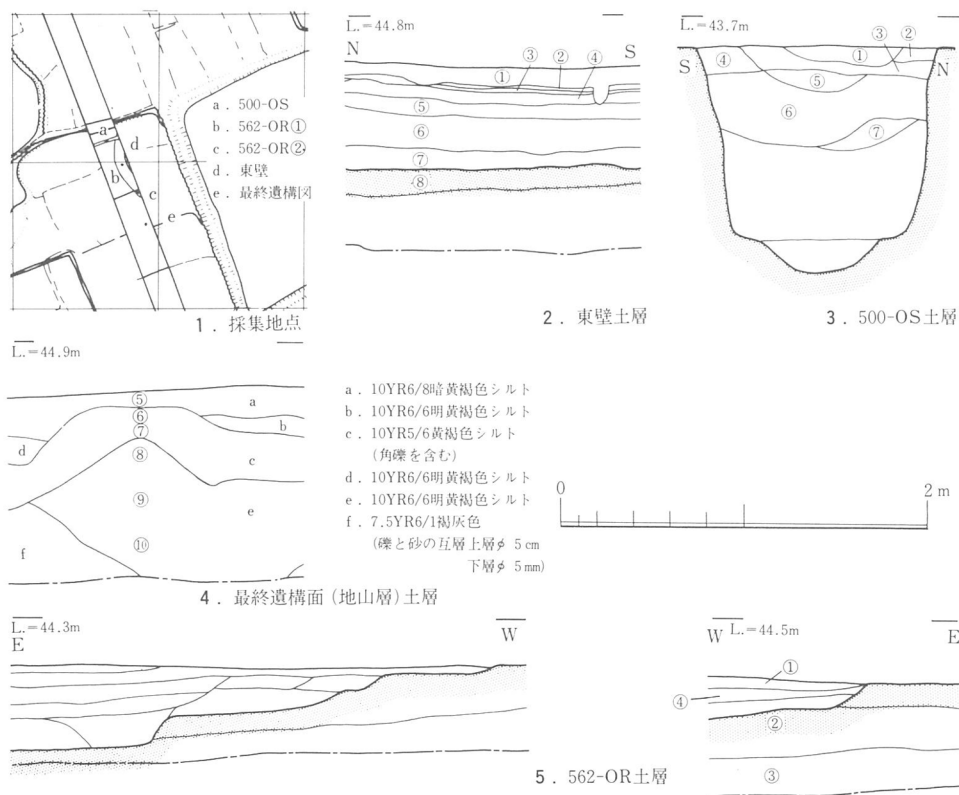
4. 分析の方法

花粉分析

(1)原理

粘土層などの堆積物や遺跡の土壌には、動物性もしくは植物性の微小な化石（＝微化石）が含まれており、それらを物理的・科学的処理によって抽出し、顕微鏡で化石の種類や数を検定し、種々の目的にそった調査を行う方法が微化石分析であって、花粉分析はそのひとつである。

堆積物に含まれる花粉化石は、その堆積当時陸上に生育した樹木や草が生産した花粉、水系や大気系を経由して堆積物粒子とともに堆積したものである。



第71図 採取地点と採取土層断面

陸上に生育する樹木や草、つまり“植生”は気候の変化や時代とともに変化し、その変化が堆積物中の花粉化石の構成や量の変化として反映する。

従って、花粉構成や消長データは、地層の識別や対比、古植生の復元に利用することができる。

(2)分析処理法

①分析試料

分析に供する試料は、シルト又は粘土で、その量は10—200 g (湿潤重量)である。試料は花粉化石の形状を保持するため湿潤状態のまま使用する。

分析に供する試料の採取間隔は、堆積層の状態と目的によって数センチメートルから数メートルと異なるが、遺跡調査の場合は、一般に遺物に基づく土層区分に対応した採取間隔をとることが多い。

②分析処理

分析処理の手順は第2表に示す分析フローの通りである。5ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

分析処理に要する薬品・器具設備の概要は以下の通りである。

- 1) 処理薬品 : 水酸化カリウム、硫酸、フッ化水素、塩化亜鉛 他
- 2) 処理工具、設備 : 遠心分離

第2表 花粉分析処理フローチャート

対象試料採取	ボーリング、露頭、坑内より目的に応じた試料を採取する
試料選択	分析試料深度の間隔を設定する粘土層では一般に1m間隔
基準量摘出	汚染部分を除去し、試料の粒度により50から200gを使用
泥化分散処理	KOH溶液等の分散剤により試料をホモジナイザーで泥化・分散
細粒物質除去	5ミクロン振動マイクロフィルターでコロイド分を分離・除去する
微化石濃縮	大型時計皿とアスピレータにより振盪・攪拌法で微化石を濃縮
沸化水素酸処理	珪藻塩鉱物質を溶解・除去する
重液分離	比重1.6から1.9の重液中で遠心分離し植物質を濃縮する
脱水処理	アセトリシス処理により脱水とセルロース分を溶解・除去する
水洗・濃縮	遠心分離機により水洗し水溶性物質を溶解・除去する
標本作成	グリセリンゼリーにより包埋しプレパラートを作成する
鑑定・計数	顕微鏡でプレパラートを帯分析し花粉化石の種類と数を作成する
統計処理	鑑定結果を集計しコンピュータに入力、処理、図表を出力する
解析	地層の識別、区分、対比についての検討を行い、年代推定、地質構造・堆積環境解析等を行う

機、振動マイクロフィルター、低速ホモジナイザー 他一般分析器具

③顕微鏡による検定・計数

抽出した花粉化石はグリセリンゼリーと混合してスライドガラス上に滴下し、カバーガラスをかけて封入してプレパラートとする。各試料につき2～3枚のプレパラートを作成する。プレパラートを顕微鏡（パノックスA H B L B 1 万能顕微鏡）により400～1000倍率で観察し、メカニルステージによる帯分析で通常100個から250個の検定、計数を行う。

(3)解析法

花粉分析結果の解析の手順は

- 1)各花粉種類の出現率（パーセント表示）計算と花粉ダイアグラムの作成
- 2)各地点における花粉消長パターンの読みとりと花粉帯文帯
- 3)地層対比や古植生・古気候の復元の順で進める。

珪藻分析の方法

(1)原理

珪藻は珪質の殻をもつ単細胞の植物プランクトンの一種で、主に河川や湖沼などの淡水域と河口、湾、大洋などの汽水もしくは海水域に生息する。珪藻分析は堆積物の中に含まれている珪藻化石を物理・化学的処理によって抽出し、堆積物生成当時に水域の環境を推定し、あるいは年代に関する検討を行う方法である。

珪藻は水域の水温、塩分濃度、酸性度などの環境要因に対応した種類が各々の環境許容範囲をもって生息する。抽出された珪藻化石が堆積物生成当時その水域に生息したものであれば、その種類構成や相対量とその変化から当時の水域の環境を復元することができる。

(2)分析処理法

分析処理は下記の手順で行う。

- ①試料の乾燥と粉碎
- ②過酸化水素処理：15%過酸化水素水で分散・泥化させる。
- ③ピロリン酸ナトリウム処理
- ④酸処理：30%塩酸と硝酸の混酸で炭酸塩酸等の鉱物、破片を処理する。
- ⑤コロイド物質の除去：振動フィルターで5 μm 以下の細粒実質を除去する。
- ⑥水洗と濃縮：トケ皿で攪拌、グラインドし珪藻化石を濃縮する。
- ⑦標本作成：ブルーツェグックスで封入しプレパラートを作る。

(3)顕微鏡による検定

珪藻プレパラートを光学顕微鏡（400～1000倍）で観察し、帯分析して通常100個から250個の珪藻化石の検定、計数を行う。

(4)解析法

珪藻ダイアグラムを作成して、各珪藻種類の変遷傾向から、分帯と体制環境変遷の推定を行う。堆積環境要素は以下のようである。

- ①塩分濃度 海水域～汽水域～淡水域
- ②生息域 外洋（大洋）性～沿岸性
- ③生活型 浮遊性～付着性～底性

5. 分析結果

花粉分析結果

(1)花粉化石の含有状況

前期のように、22試料の花粉分析を行った結果、15試料が花粉化石を含有していた。東壁の分析試料のうち試料No. 6、7、500—O S 遺構の分析試料のうち試料No. 2、3、562—O R 遺構の分析試料のうち試料No. 3、4、5、562—O R の試料No. 1、4、最終遺構面の試料No. 5、6、7、9、10の合計14試料は化石をほとんど含有していなかった。

(2)検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は、次ページに示す38種類である。

これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は以下のようである。

① 卓越樹木花粉

ニヨウマツ亜属、ツガ属、コウヤマキ属、アカガシ属、コナラ属

② 卓越草木花粉

イネ科、イネ科 (>40)

③ 栽培種花粉

イネ科 (>40)、ソバ属、ワタ属、アブラナ科 (?)

このうちイネ科 (>40) はイネ科のうち、花粉粒径が40 μ 以上のものを示しており、イネ属 (*Oryza*) を含んでいると考えられるが、そのすべてがイネ属であるとは断定出来ない。

〔主要樹木花粉種類〕

1 <i>Podocarpus</i>	(イヌマキ属)	14 <i>Carpinus</i>	(クマシデ属)
2 <i>Diploxylon</i>	(ニヨウマツ亜属)	16 <i>Cyclobalanopsis</i>	(アカガシ亜属)
4 <i>Picea</i>	(トウヒ属)	17 <i>Quercus</i>	(コナラ亜属)
5 <i>Abies</i>	(モミ属)	18 <i>Fagus</i>	(ブナ属)
6 <i>Tsuga</i>	(ツガ属)	19 <i>Castanopsis</i>	(イシノキ属)
8 <i>Cryptomeria</i>	(スギ属)	20 <i>Castanea</i>	(クリ属)
10 <i>Sciadopitys</i>	(コウヤマキ属)	21 <i>Juglans</i>	(クルミ属)
11 CUPRESSACEAE	(ヒノキ属)	22 <i>Pterocarya</i>	(サワグルミ属)
12 <i>Alnus</i>	(ハンノキ)属	23 <i>Ulmus</i>	(ニレ属)
13 <i>Betula</i>	(カバノキ属)	25 <i>Celtis</i>	(エノキ属)

〔主要草本花粉種類〕

26 GRAMINEAE	(イネ科)	29 <i>Taraxacum</i>	(タンポポ亜科)
27 CYPERACEAE	(カヤツリグサ科)	30 COMPOSITAE	キク科 *ヨモギ属, タンポポ亜科を除く)
28 <i>Artemisia</i>	(ヨモギ属)		

〔その他の樹木花粉種類〕

31 <i>Ilex</i>	(モチノキ属)	41 <i>Elaeagnus</i>	(グミ属)
32 <i>Acer</i>	(カエデ属)	42 <i>Symplocos</i>	(ハイノキ属)
33 <i>Aesculus</i>	(トチノキ属)	55 ERICACEAE	(ツツジ科)
35 OLEACEAE	(モクセイ科)	56 MORACEAE	(クワ科)
38 EUPHORBIACEAE	(トウダイグサ科)		

〔その他の草本花粉種類〕

45 CHENPODIACEAE	(アカザ科)	52 HALORAGACEAE	(アリノトウグサ科)
46 CARYOPHYLLACEAE	(メデシコ科)	57 GRAMINEAE	(40ミクロン以上の イネ科)
47 POLYGONACEAE	(タデ科)	58 <i>Fagopyrum</i>	(ソバ属)
48 CURCIFERAE	(アブラナ科)	59 <i>Gossypium</i>	(ワタ属)
49 CAPRIFOLIACEAE	(スイカズラ科)	60 UMBELLIFERAE	(セリ科)

(3)花粉組成の変遷傾向と分帯

①東壁の花粉組成変遷と分帯

試料No. 1～8において、花粉組成は、ニヨウマツ亜属が試料No. 4から試料No. 1の間に増加し、逆にアカガシ亜属コナラ亜属は試料No. 4から試料No. 1の間にほとんど消失してしまう。

ツガ属とスギ属、コウヤマキ属は試料No. 6 から試料No. 4 の間にかけて減少傾向を示し、試料No. 1 で同じく殆ど消失してしまう。

イネ科、ヨモギ属、イネ科 (>40) などは明瞭な変遷を示さないが、このうち、イネ科 (>40) は試料No. 1 においても最も高率となる。

②500—O S 遺構の花粉組成変遷と分帯

試料No. 1～8 において、逆にコウヤマキ属が試料No. 5 より上位に向かって減少傾向を示す特徴が認められる。

ツガ属とアカガシ亜属、イネ科はニシウマツ亜属と似た増加傾向を示す。他のモミ属、スギ属、コナラ亜属、ヨモギ属などの付随タクサは明瞭な層序に沿う変遷を示さない。

③562—O R 遺構の花粉組成と分帯

試料No. 1～3 において、花粉組成は、ニヨウマツ亜属とアカガシ亜属が上位に向かって増加傾向を示し、逆にコウヤマキ属とツガ属が上位に向かって減少傾向を示す特徴が認められる。

イネ科 (>40) は、試料No. 3～1 にかけて顕著な増加傾向を示し、試料No. 1 ではイネ科よりも高率となる。

他のモミ属、スギ属、ヨモギ属などの付随タクサは明瞭な層序に沿う変遷を示さない。

④562—O R 遺構の花粉組成変遷と分帯

試料No. 1～4 のうち、No. 2、3 の花粉組成は、ツガ属とコウヤマキ属が卓越し、アカガシ亜属が上位に向かって増加傾向を示す特徴が認められる。

イネ科 (>40) は、No. 2 に出現するがその比率は低い。

⑤最終遺構面の花粉組成変遷と分帯

試料No. 5～10 のうち、No. 8 の花粉組成は、ツガ属とコウヤマキ属、アカガシ亜属が卓越する特徴を示す。

珪藻分析結果

(1)珪藻化石の含有状況

前記のように、22試料の珪藻分析を行ったが、ほとんどの試料には珪藻化石が含有せず、3 試料にはわずかに珪藻化石が含まれていたが、化石は細片化しており、同定できる種はごくわずかであった。

珪藻化石が含まれていないことの原因としては、試料が粗粒であるため本来珪藻の含有

率がごく低いことと、風化作用等によって消失したものでないかと考えられる。

(2) 検出された珪藻化石の種類

検出された珪藻化石の種類は、下に示す26種類である。

これらのうち、卓越するにはいたらないが出現率の高い種類は以下のようなものである。

Pinnularia gibba

P. hemiptera

P. borearis

P. castor

東壁の検出花粉化石種類

[PLLEN TAXA LIST] UWAFUJI-E-WALL

* 1 <i>Podocarpus</i>	* 18 <i>Fagus</i>	* 35 OLEACEAE	* 52 HALORAGACEAE
* 2 <i>Diploxylon</i>	* 19 <i>Castanopsis</i>	36 <i>Myrica</i>	53 ANACARDIACEAE
3 <i>Haploxylon</i>	20 <i>Castanea</i>	37 <i>Lagerstroemia</i>	54 THEACEAE
4 <i>Picea</i>	* 21 <i>Juglans</i>	38 EUPHORBIACEAE	* 55 ERICACEAE
* 5 <i>Abies</i>	* 22 <i>Pterocarya</i>	39 <i>Liquidamber</i>	* 56 MORACEAE
* 6 <i>Tsuga</i>	* 23 <i>Ulmus</i>	40 ROSACEAE	* 57 GRAMINEAE(>40)
7 <i>Pseudotsuga</i>	24 <i>Zelkova</i>	41 <i>Elaeagnus</i>	* 58 <i>Fagopyrum</i>
* 8 <i>Cryptomeria</i>	* 25 <i>Celtis</i>	42 <i>Symplocos</i>	* 59 <i>Gossypium</i>
9 TAXODIACEAE	* 26 GRAMINEAE	43 CELASTRACEAE	* 60 UMBELLIFERAE
* 10 <i>Sciadopitys</i>	* 27 CYPERACEAE	44 <i>Typha</i>	
* 11 CUPRESSACEAE	* 28 <i>Artemisia</i>	* 45 CHENOPODIACEAE	
* 12 <i>Abnus</i>	* 29 <i>Taraxacum</i>	* 46 CARYOPHYLLACEAE	
* 13 <i>Betula</i>	* 30 COMPOSITAE	* 47 POLYGONACEAE	
* 14 <i>Carpinus</i>	* 31 <i>Ilex</i>	* 48 CURCIFERAE	
* 15 <i>Corylus</i>	* 32 <i>Acer</i>	49 CAPRIFOLIACEAE	
* 16 <i>Cyclobalanopsis</i>	33 <i>Aesculus</i>	50 <i>Menyanthes</i>	
* 17 <i>Quercus</i>	34 <i>Tilia</i>	51 <i>Sanquisorba</i>	

(3) 珪藻組成

① 東壁の珪藻組成

試料No. 1 の珪藻組成は、*Pinnularia*属が卓越する。

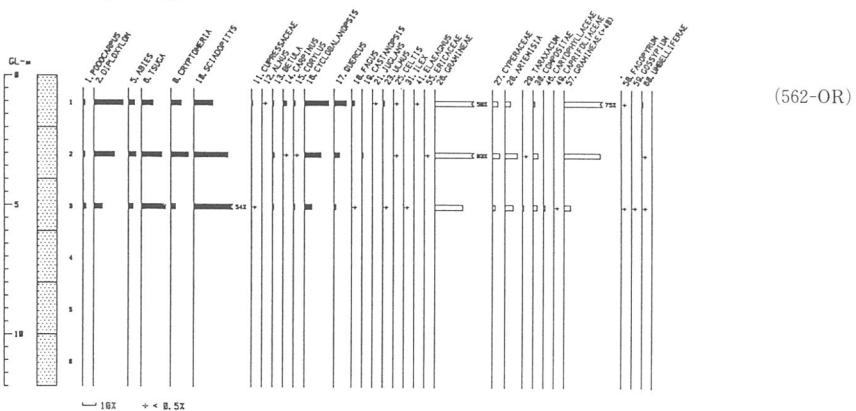
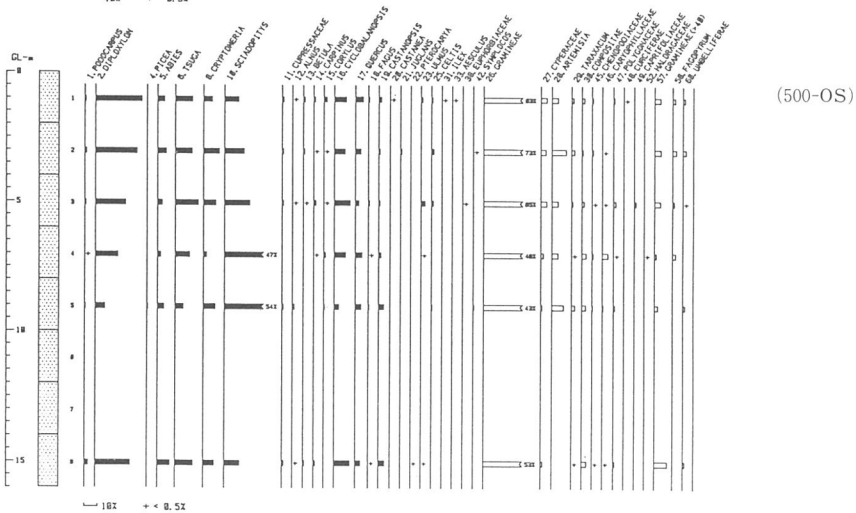
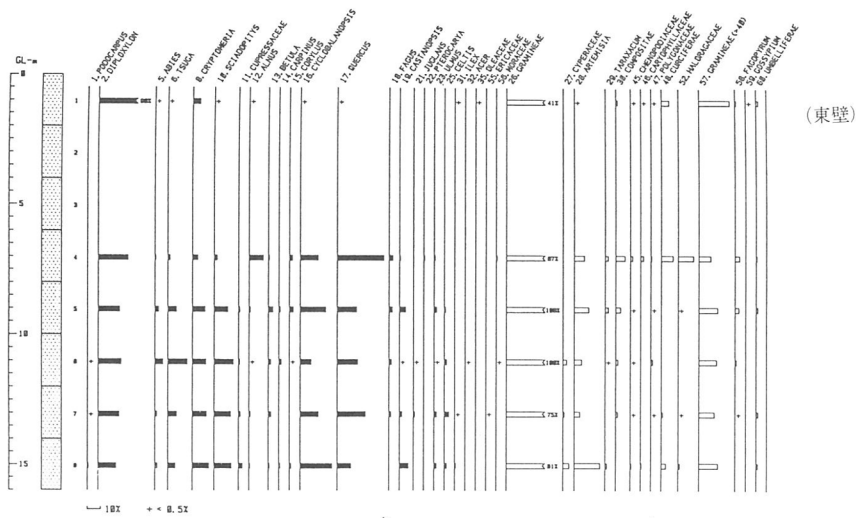
② 500—O S 遺構の珪藻組成

試料No. 8 の珪藻組成は、*Epithemia*属、*Eunotia*属、*Pinnularia*属などからなる。

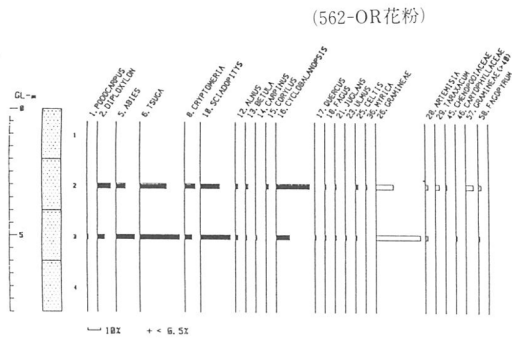
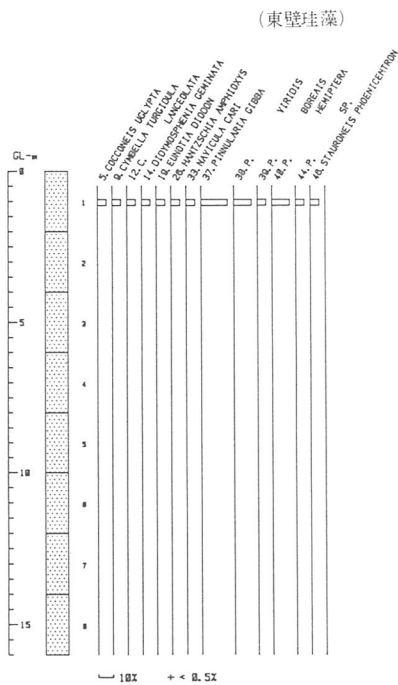
③ 562—O R 遺構の珪藻組成

試料No. 2 の珪藻組成は、*Pinnularia*属が卓越する。

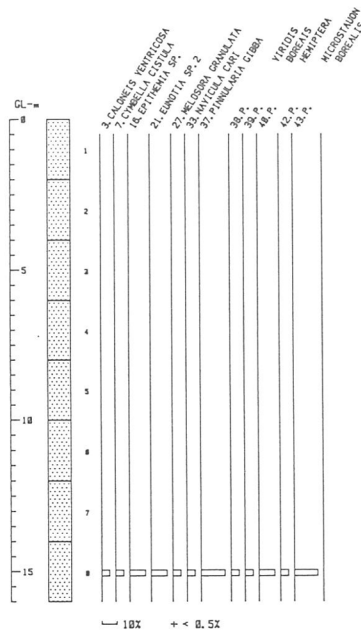
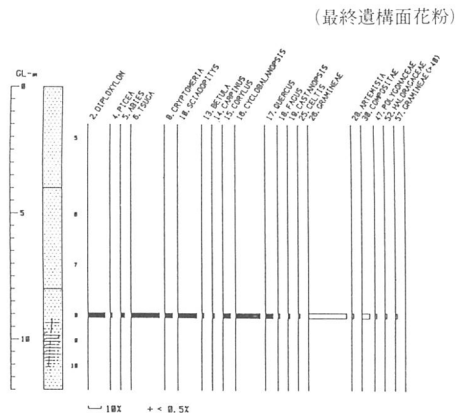
いずれの場合も海水の影響はないものと判断される。



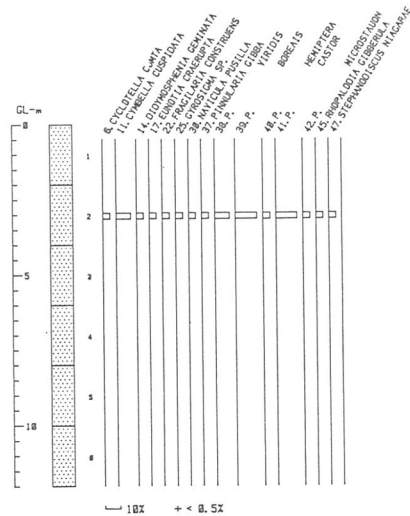
第72図 花粉・珪藻ダイヤグラム (1)



(500-OS珪藻)



(562-OR珪藻)



第73図 花粉・珪藻ダイヤグラム (2)

6. 考察

花粉化石による地質層序区分

(1) 5地点の層序関係について

5地点のうち東壁と500—O S遺構は、類似対応する花粉化石の礎石・変遷が見出せないため、この点から層序の関係を論ずることは困難である。一般的にみて自然植生要素の比率が高い500—O S遺構の方が東壁より古い時代の堆積物ではないかと想像される。

500—O Sと562—O Rの両遺構堆積物は、ニヨウマツ亜属、スギ属、コウヤマキ属、イネ科 (>40) の変遷傾向がほぼ一致し、この点から、500—O S遺構の試料No. 5～1と562—O R遺構の試料No. 3～1は同期間の一連の堆積物と推定される。ただし、アカガシ亜属、イネ科 (>40) などの出現率には上部で相違もみられる。

562—O Rと最終遺構面はいずれも自然植生要素が卓越し、さらに植栽要素の比率が低い点で、類似した花粉組成を示す。したがって、両地点はほぼ同時期の堆積物ではないかと推定される。また、両地点は、上記の点から500—O Sと562—O Rの下部もしくはそれより下位の堆積物と推定される。562—O Rの2地点はいずれもツガ属の上位に向かっての減少傾向、アカガシ亜属の増加傾向など自然植生要素の変遷には類似性がみられるが、562—O R（試料No. 1～6）にみられるようなイネ科 (>40) の上位へ向かっての増加は562—O R（試料No. 1～4）には認められない。

(2) 層序的年代

従来の沿岸沖積層や他の遺跡の花粉化石のデータからみて、500—O Sならびに562—O R（試料No. 1～6）の両遺構堆積物は、完新世後期において自然植生要素がしだいに減少し、二次林要素であるニヨウマツ亜属が増加する傾向を示してはいるが、その変化は穏やかであり、その変曲点が明らかではない。従って、この点から層序的時代を推定することは困難である。

特にツガ属、コウヤマキ属が卓越する562—O R（試料No. 1～4）ならびに最終遺構面の堆積物は、下位の中位段丘堆積層からの再堆積化石を含んでいる可能性が指摘される。堆積環境について

3地点ではいずれも1地点1試料の珪藻分析結果しか得られていないために、各地点での堆積環境の変化は考察出来ない。

3地点の珪藻組成は、*Pinnularia*属、*Cymbella*属をはじめいずれも低性もしくは付着性の種類を主とし、浮遊性種はごくわずかである。

この点からは流水域もしくは流水域からの流れ込みのある堆積環境が推定されるが、珪藻化石の保存状態からみて、これらの化石が再堆積の二次化石である疑いもある。

植生の変遷について

先に述べたように、両遺構の花粉組成・変遷からは、下位より上位に向かって、自然植生要素が減少し、二次林要素が増加する植生変化が推定される。

自然植生要素としては、コウヤマキ属、ツガ属、スギ属、などの温帯針葉樹類が花粉化石の比率として高く、これにアカガシ亜属、コナラ亜属などを伴っている。この中でコウヤマキ属の比率が高いことは注目に値する。

ただし、562—O R 遺構（試料No. 1～6）において、アカガシ亜属が増加する傾向を示す点は、上記の想定と逆の関係であり、562—O R（試料No. 1～4）にも同じ関係が認められる。

東壁の花粉組成・変遷も基本的には同じ傾向を示すが、上記の遺構堆積物に対して、アカガシ亜属、コナラ亜属の花粉化石の比率が高い。

こうした東壁と、遺構堆積物の花粉組成の相違が、時代の違いによるものか、堆積物の形成に関する後背地もしくは堆積様相の違いによるものかは判断材料がない。もし、ほぼ同時代の堆積物であるならば、水つきの堆積物であり、この点から水系に依存する広い後背地をもつと考えられる遺構堆積物の方が山麓から山腹に分布したであろうと考えられるコウヤマキ属やスギ属などの冷温帯針葉樹類を高率に含有していることが、1つの解釈として考えられる。

栽培植物について

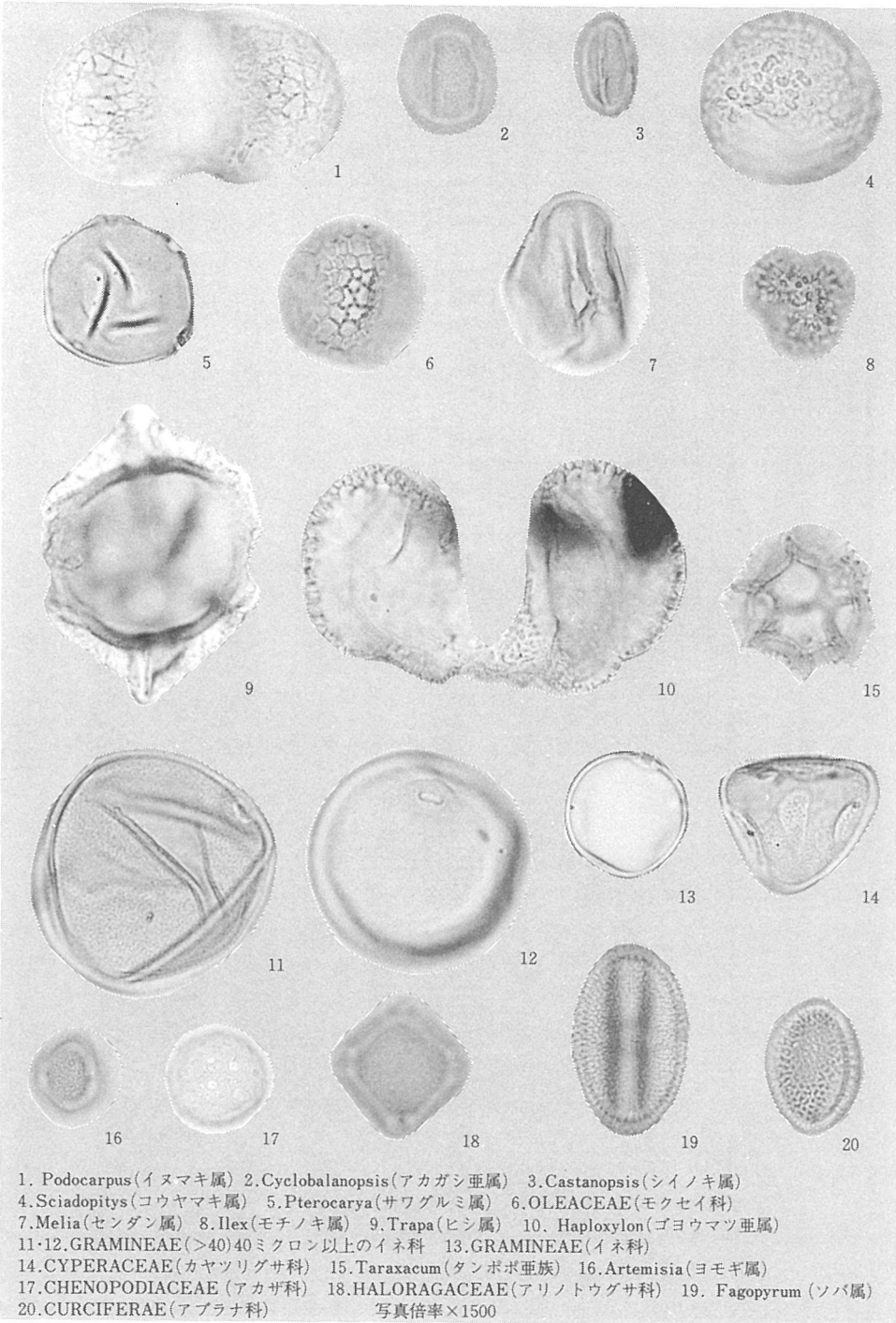
562—O R 遺構（試料No. 1～6）で明らかのように、ニヨウマツ亜属の増加に伴って、イネ科（>40）が増加する。これは基本的に自然林の後退・縮小とイネ科栽培地の拡大を意味するものであろう。

ソバ属はどの地点でも低率であるが出現する。

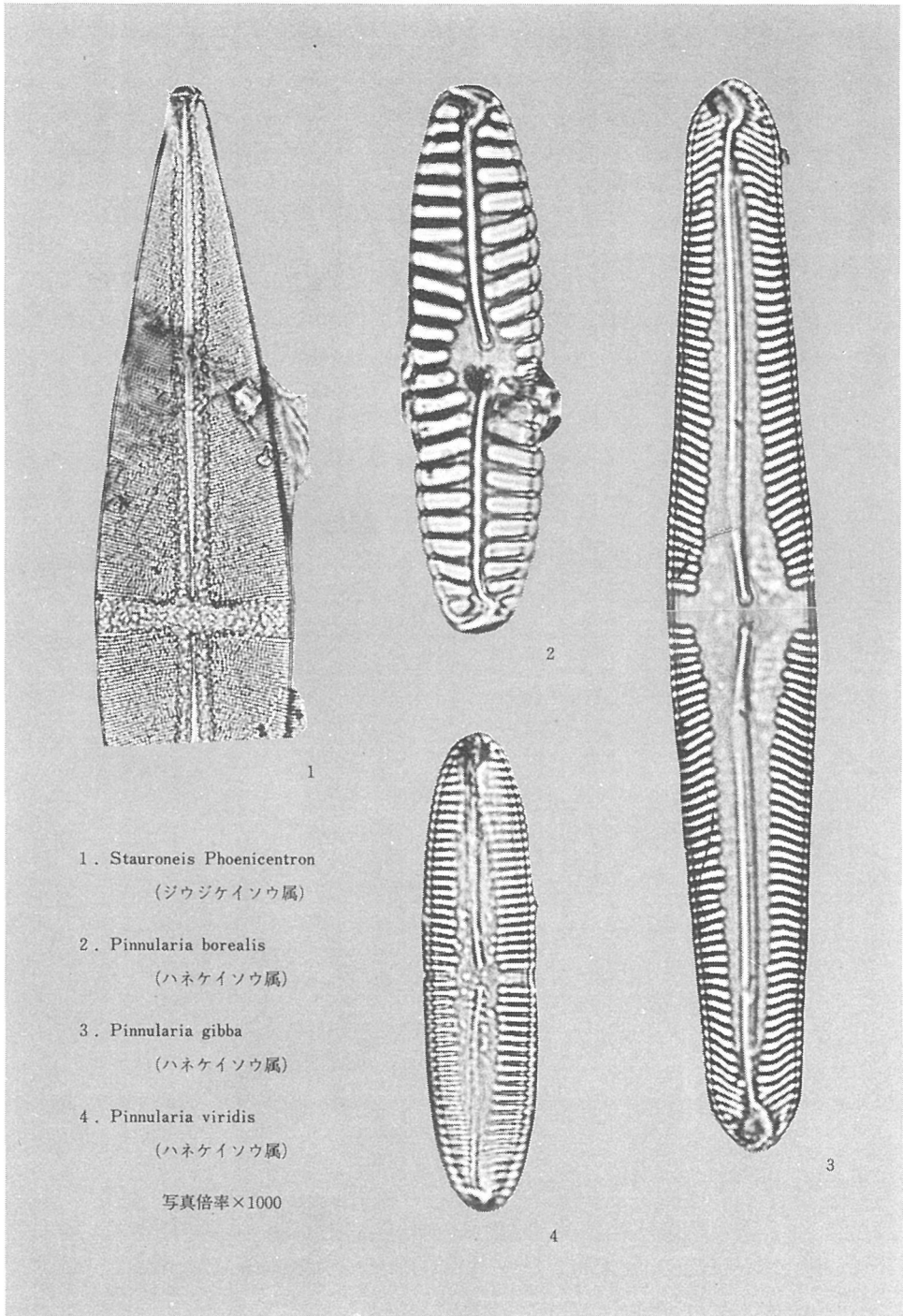
ワタ属は、東壁の試料No. 1、562—O R 遺構（試料No. 1～6）の試料No. 3から産出する。

この他、東壁でみられるように、イネ科（>40）の増加に対応して、アブラナ科の出現が認められ、これはナタネの栽培を意味するのではないかと考えられる。

* 本稿は、川崎地質株式会社『上フジ遺跡花粉化石等分析業務報告書』昭和62年3月を再編集して収録したものである。



第74図 花粉化石顕微鏡写真



第75図 珪藻化石頭微鏡写真

図 版

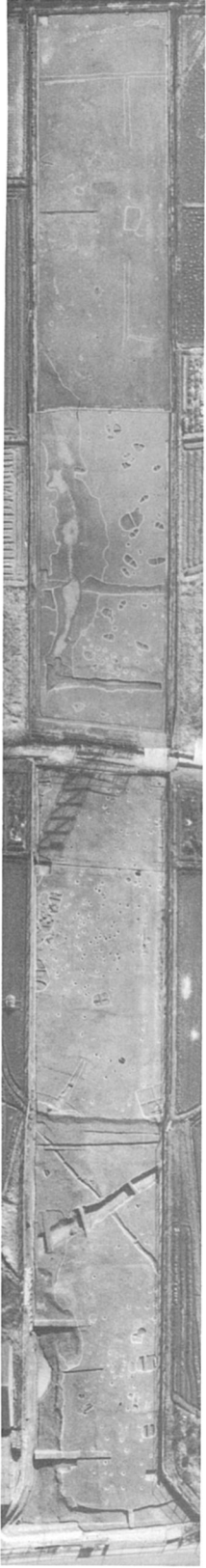
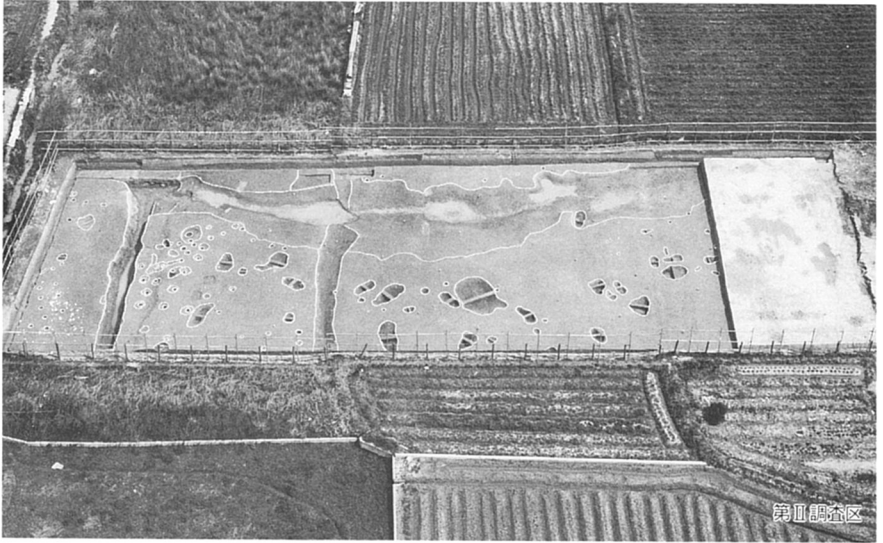
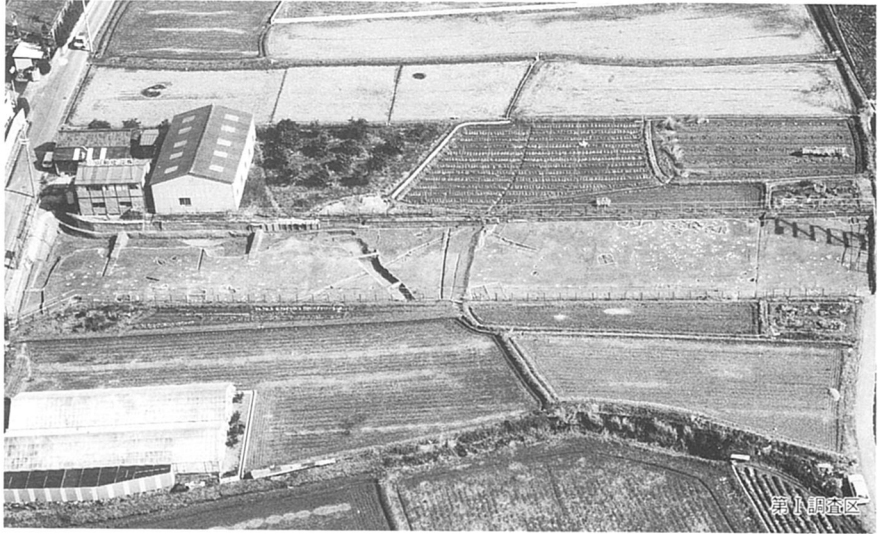




(昭和62年1月 上空より)



調査地全景 (北から)

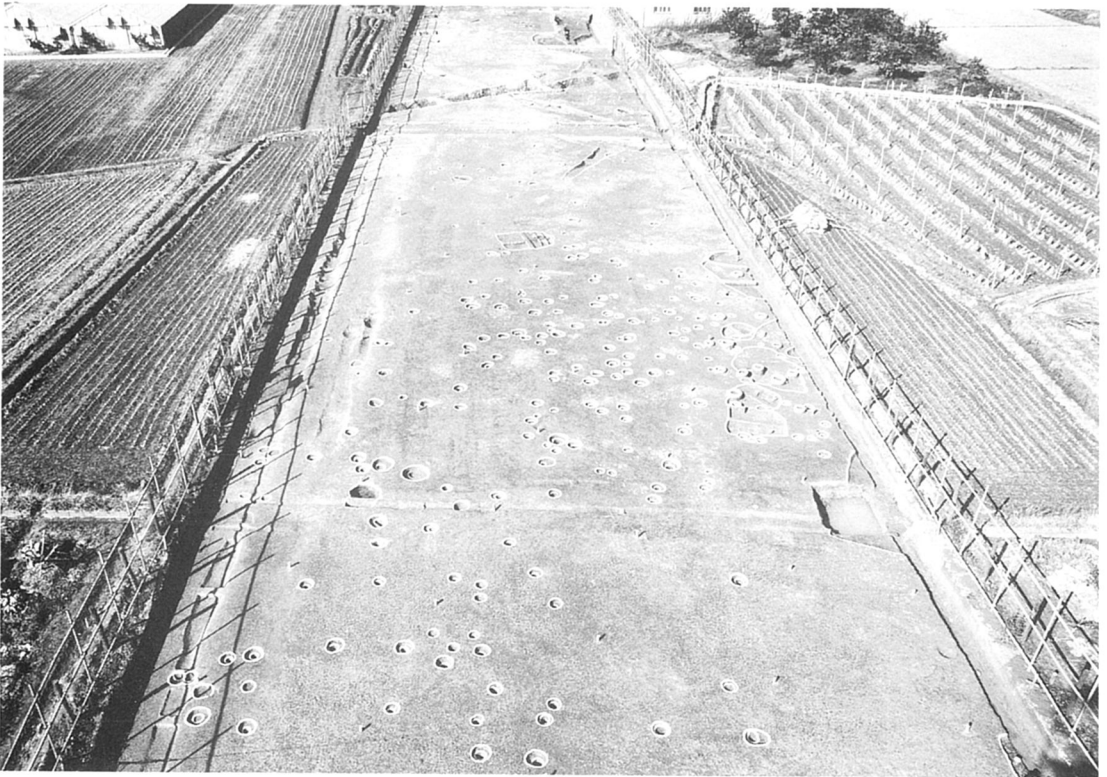


(空中から)

(西から)



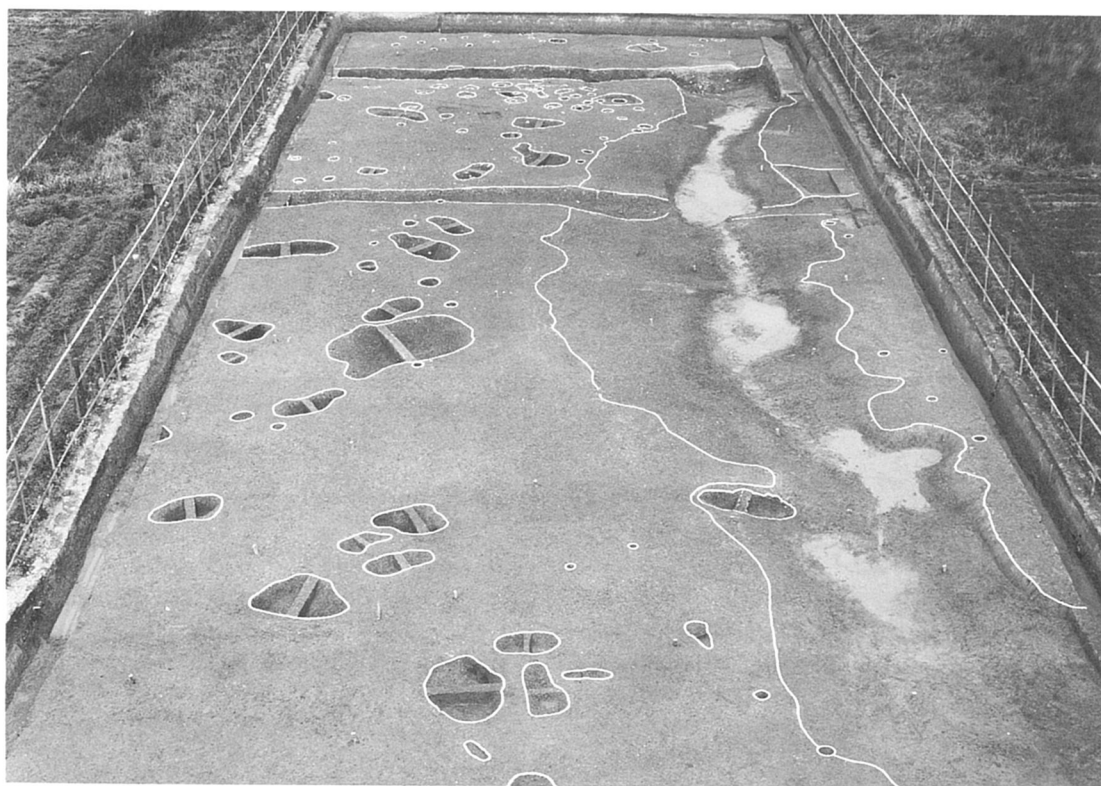
全景（北から）



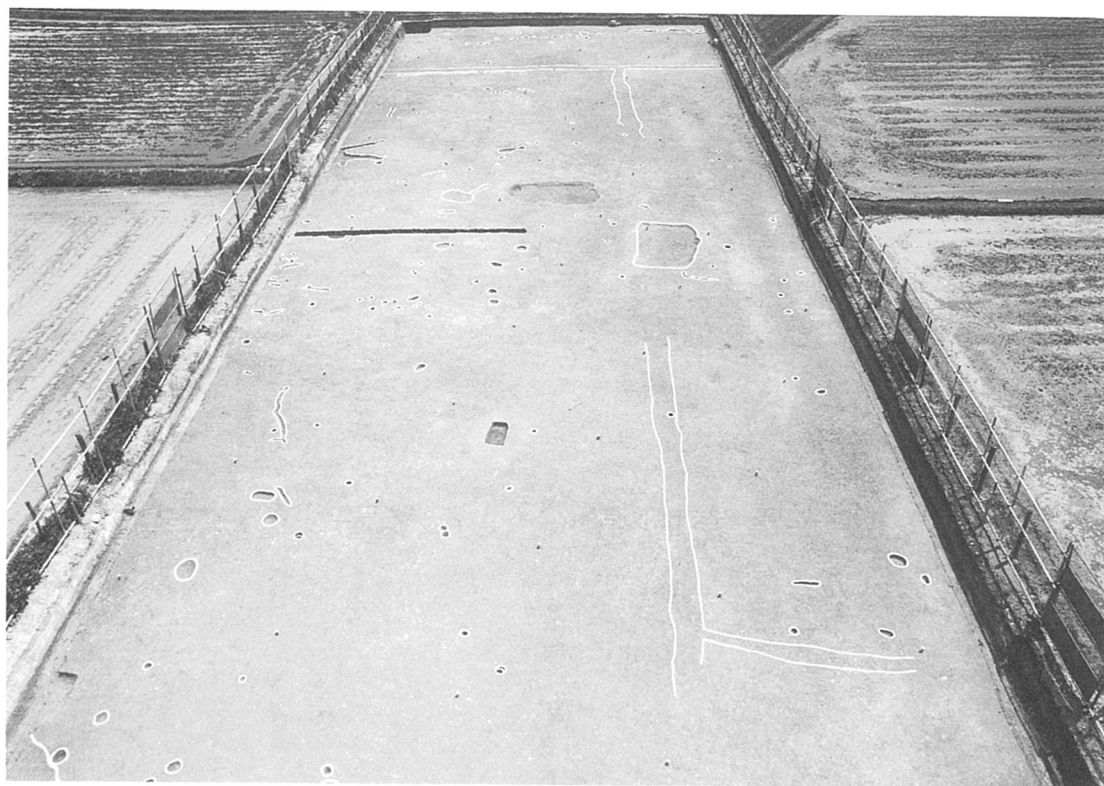
全景（南から）



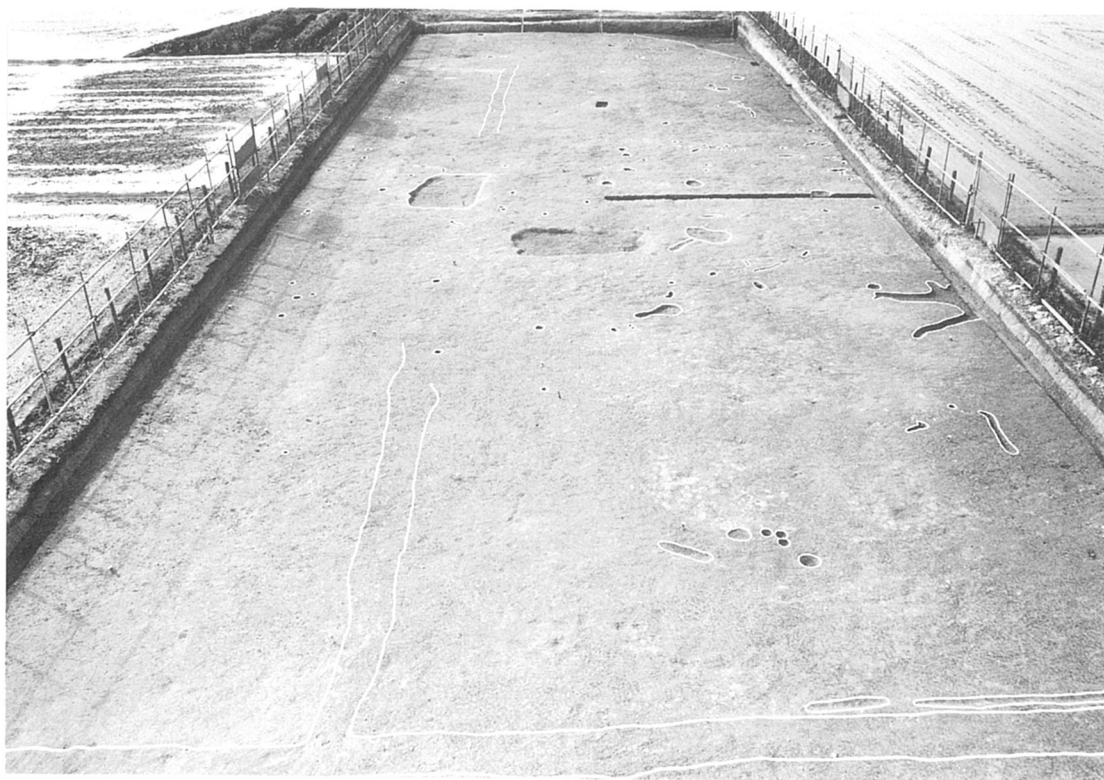
(北から)



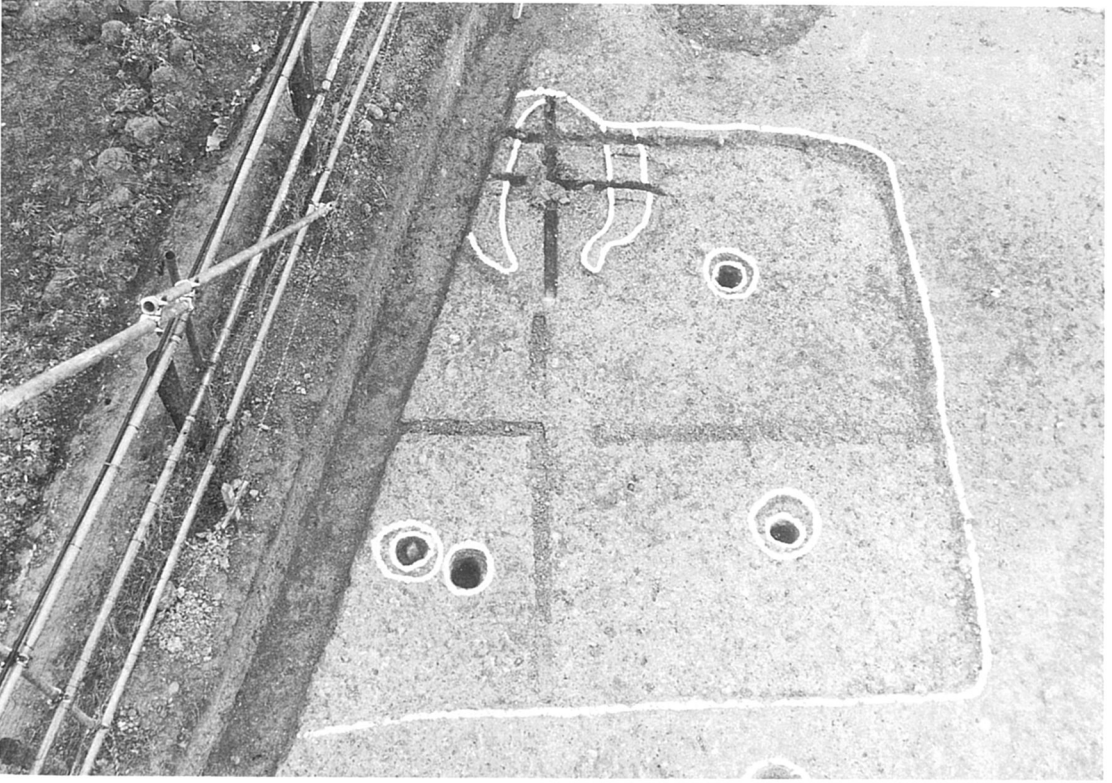
(南から)



(北から)



(南から)



全景（南から）



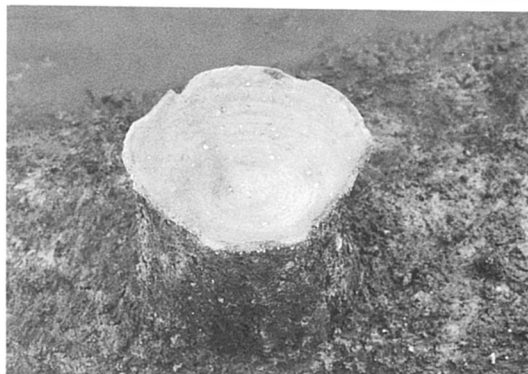
全景（東から）



290-ODカマド (南から)



カマドの支脚部分



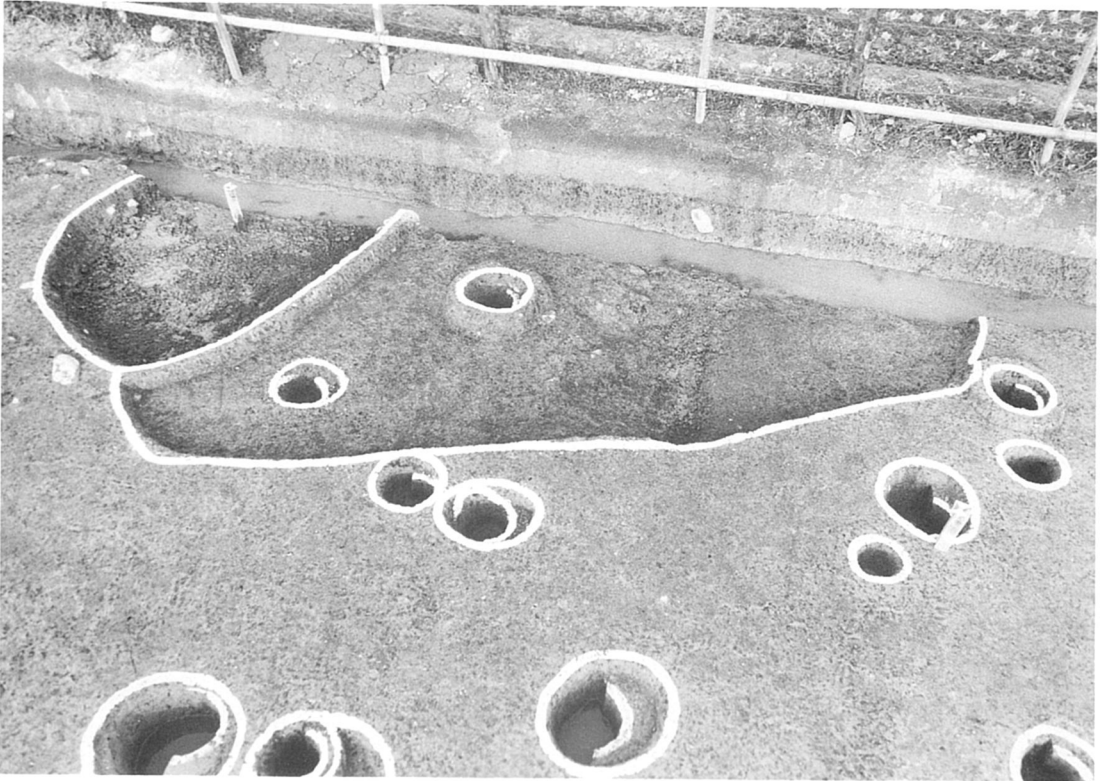
土器出土状態 (291-OD)
(393-OD)



全景（北西より）



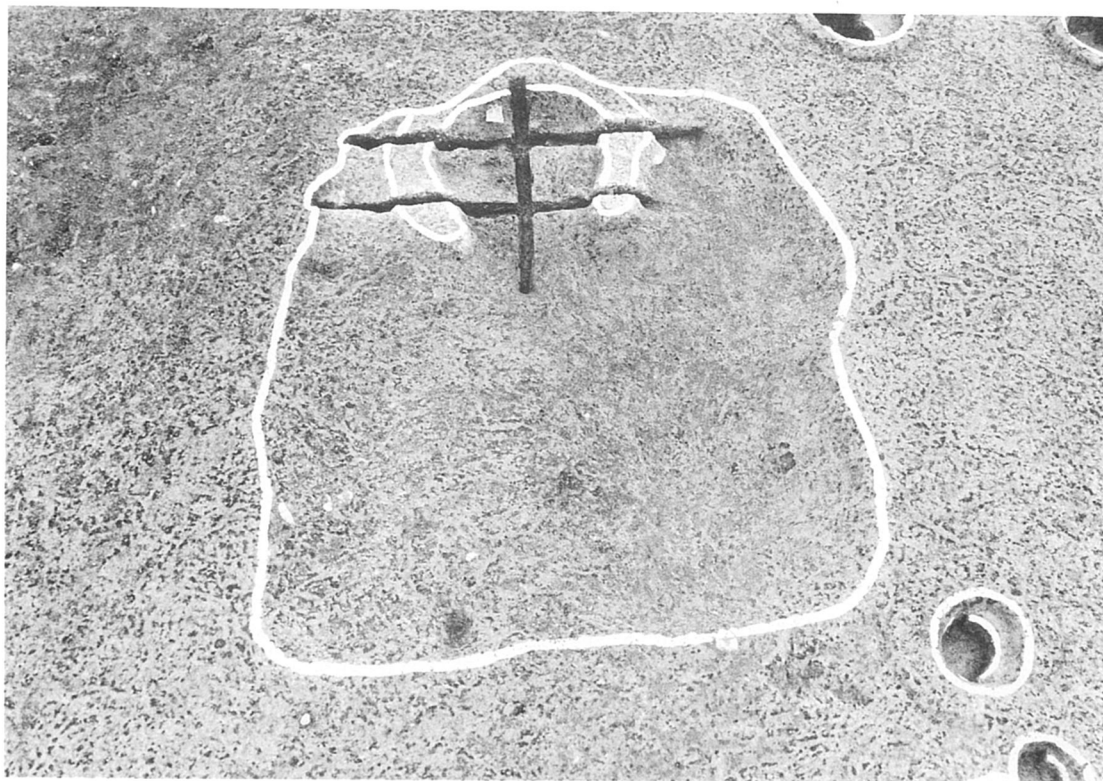
全景（西より）



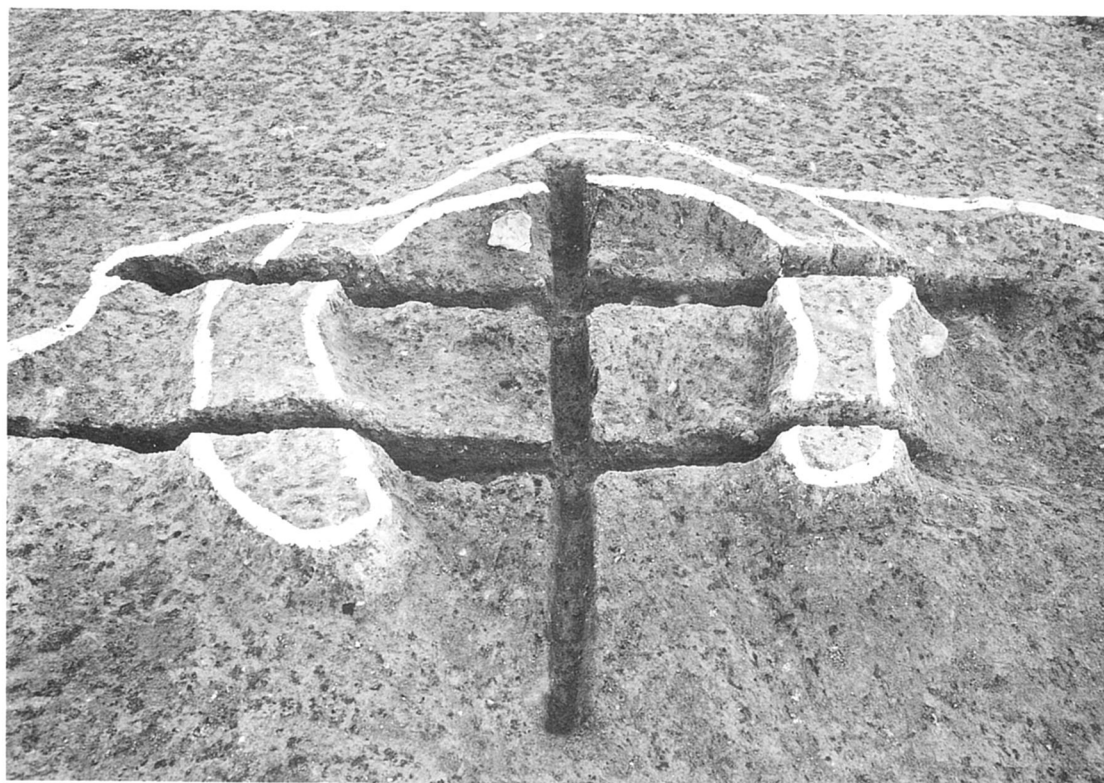
全景（西から）



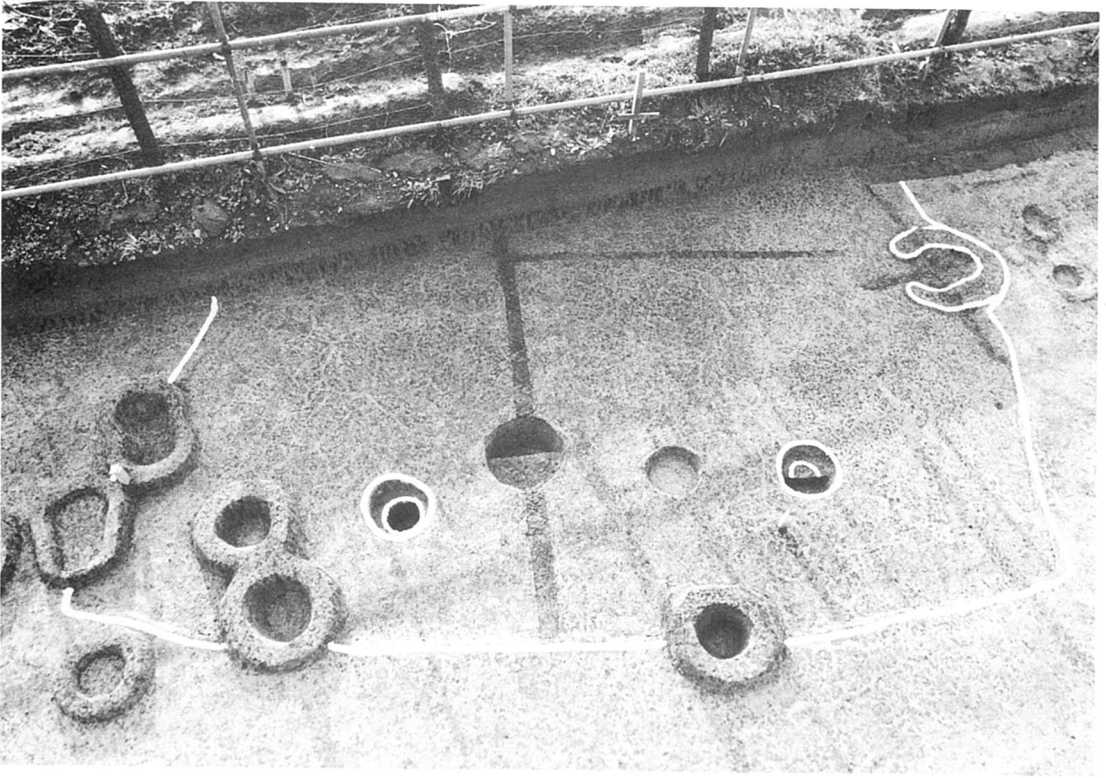
全景（北西から）



全景 (西から)



カマド (西から)



全景（東より）



カマド（南より）

図版一三 掘立柱建物跡 210・I 調査区柱穴群

